潮吹き放尿連続射精！無垢な少年を
巨乳お姉様達が逆レイプ蹂躙陵辱!!

M少年配管工とわれの淫乱姫君

おねショタメイン
ショタ受ＣＧ集

ここは茸王国。若くして配管工として働いている少年の元へ、慌てた様子のキノピオが訪れこう言った。
『大変です、マリオさん！突然お城に亀の魔王が現れ、姫を攫ってしまいました！』

なんだって？それは大変だ！

ドッ!!

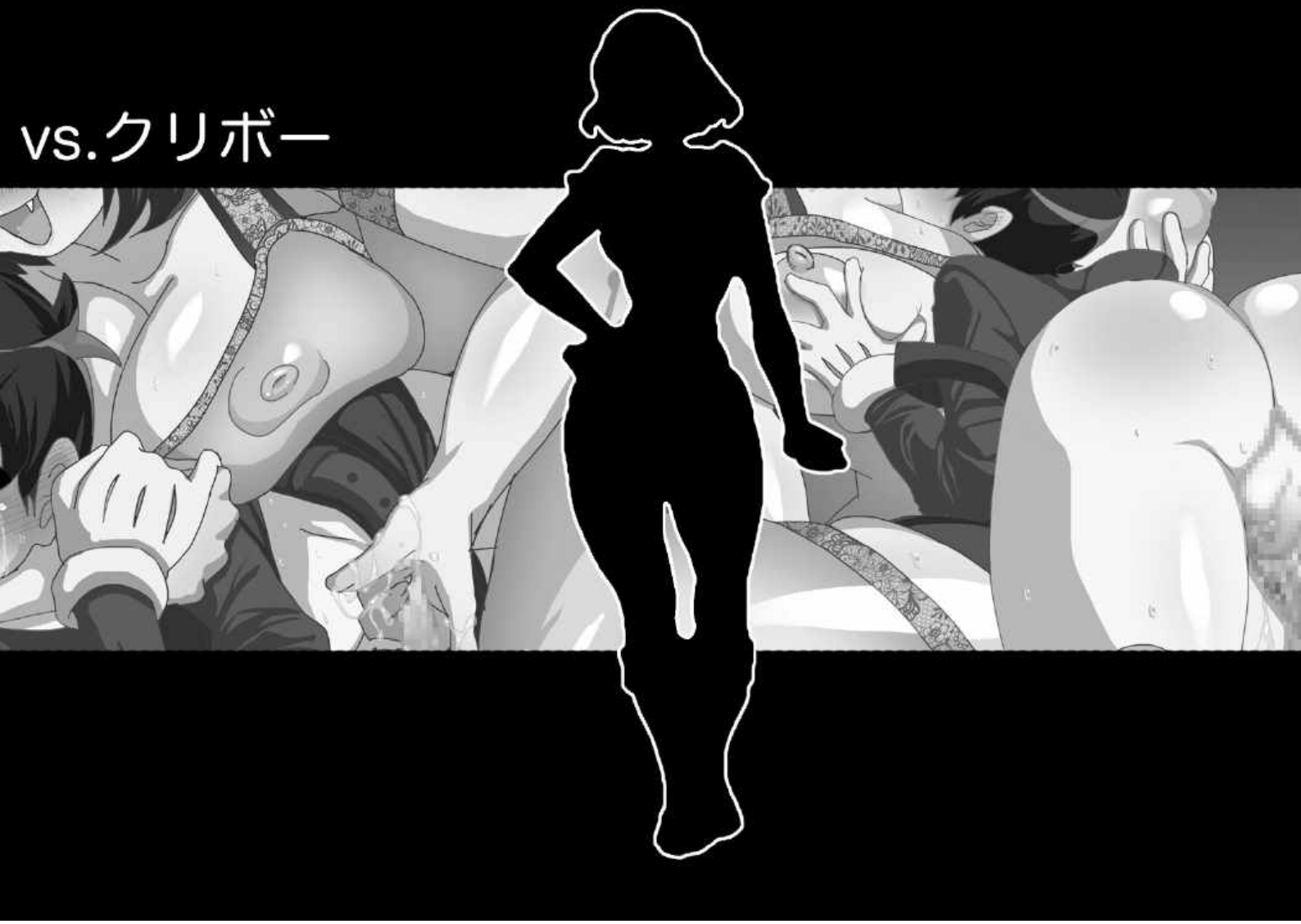
こうしちゃいられない、すぐ助けにいかなくちゃ！姫様、待っててください っ

この国を治める姫の一大事に、少年はすぐさま冒険へと旅立ったのだった…

簡単な人物紹介
マリオ
主人公のヨッタ。
姫様を救う旅に出る。
未経験・童貞で
ちょっとM気味？
クリボー
オナニー大好き。
モンスターの中
では一番下っ端。
バランスの良い
スタイル。
ノコノコ（姉）
双子の姉。
童貞大好き、
最近なんだか妹が
冷たい気がする。
気持ちいいこと大好き。
ノコノコ（妹）
双子の妹。
いつも姉にオイシイ
ところを持っていかれる
のでいつか見返したい。
気持ちいいこと大好き。

☆簡単な人物紹介
♀ハンマーブロス
対象をハンマーで
気絶させてから
妻騎するのが趣味。
弱らせていたぶるのが好き。
♂クッパ
姫を攫った魔王。
巨根。
顔は出てこない。
♀ピーチ姫
攫われた草王国の姫。
クッパ城の奥深くに
閉じ込められていて
ちしいが…？

vs.クリボー



これから始まる冒険へと身を躍らせた少年だったが、次々に襲いかかってくるモンスターにあえなく捕まってしまった。雌のクリボーは少年を地面の上に押し倒し、拘束するとすぐ短パンのベルトに手をかけその未熟な性器を取り出す。少年は当然必死に抵抗した。排泄以外では使わないはずのそこを、執拗に手のひらで擦ってくる女に驚きを隠せない。少年は性を知らなかったのだ。女の手で握ってしまえばすっぽり隠れてしまうほど小さなペニスは、ふにゃりと柔らかく何の反応も見せない。

しかし一擦り、二擦りする間に、少年は握られたペニスに違和感を覚えた。芯の部分に熱が灯ったような気がしたのだ。

数分間、そんなことを繰り返していると、少年のペニスはしっかりと固くなり、鈴口からは透明な液体が滴り落ちてきた。意識がペニスに集中し、それと同時に後頭部へ押し付けられている女の柔らかな膨らみが妙に気になってきてしまった。身体が熱い。それは少年が初めて覚えた、性の発露だった。訳も分からぬまま、知識も何もないままに、少年は無理矢理に欲を引きずり出されようとしていた。

少年は恐怖を覚えた。熱を持ち、まるで生き物のようにピクピクと震え汁を漏らす自身のペニスが怖くてたまらなかった。それに加え、覚えのある感覚が少年を襲い始めていた。

少年はペニスの違和感を尿意だと結論づけた、実際それは尿意を限界まで我慢している時とよく似ていた。少年に羞恥心が走る…女性の前で、しかも手の中で小便を漏らすなんて――例えそれが彼女から仕掛けてきた行為だとしても、少年は恥ずかしくて仕方がなかった。

少年は何とか我慢しようと試みた、が、若い身体は突然訪れた性の波に抗えるはずもなく、限界はすぐそこまで押し迫っていた。顔が赤く染まり、頭がぼうっとしてくる。何も考えられない、ただただペニスから這い出ようとする熱を逃したくて、仕方がなかった。

びくびくびく、とペニスが勢い良く跳ねる。少年にとってそれは、十分にも二十分にも感じられる程長いことだったが、実際は我慢しようと決意してからものの数秒でペニスから液体を吐き出していた。しかし、ぷしゅっと鈴口から出たものは、少年が思っていた小便でも、女が考えていた白い精液でもなかった。透明だったのだ。今日ここにきて初めて性を感じとった少年は、しかし当然の如く身体の準備が出来ていなかった。

……えっ？
透明？何これ
ビクッ
ビクビクッ
ビクンッ!!
ビクッ
ビクッ
ビクッ

少年がまだ精通していないということを悟ると女はニヤッと笑い、舌なめずりをした。そう、そうか、腕の中で震えている彼は、まだ自慰も知らない、ましてや精液を吐き出したことすらもない無垢で純粋な少年なのだ。彼女は一気に雌の顔を覗かせた。

汚れを知らない少年に、欲を覚えさせることへの期待、背徳感、そして目の前で精通の瞬間が見られるかもしれないという、常では有り得ないそのシチュエーションに、女は下腹がじんと甘く疼いたのを感じた。

握り込んだペニスは未だ敏感で、体質だろうか、それとも精通前は皆こうなるのだろうか、ぼたぼたと止めどなく透明な液体を零していた。軽く擦ると、面白いくらいに少年の身体がびくびくと痙攣するのを感じて、このままペニスを刺激し続けたらどうなるだろうと、悪戯を仕掛ける子供のように女は期待に胸踊らせるのだった。

……数十分後……

空間にぬちゅぬちゅと濡れた音が鳴り響く。激しく上下にペニスを扱く女性の手は、少年の性器から溢れ出る液体で完全に濡れそぼっていた。断続的にペニスから吐き出されるその液体は、もはや先走りなのか、それともオーガズムと共に吐き出される精液未満の透明な液体なのかさえ分からなかった。オーガズムを覚えたばかりの幼い身体は敏感で、もう何度達したのだろう。地面に広がる透明な水たまりが少年の快感を如実に表している。

ビクンッ!!
おぉ…また…
ぶしゅっ ぶしゅぶしゅっ
ひぎっ…は、はひ…っはーっはーっ、あ、ぁっも…も、でな、おしっこでにゃい…っおねが、もうっ
ふふっ、だぁめ♡今びゅっびゅしてる透明のさらっとしたやつじゃなくってぇ、白くてねばってるエロ汁出すまで離してあげなぁい♡
うぁっ、や、もうやら…っ!おぢんぢんもうやらっぁ、あ、また、またきひゃうっおしっこ、くるじいほぅのおひっこきひゃ…
はっ♥
あはっ♡またイッてるぅ♡
ぴくぴくぴくっ
ぴくぴくっ
ぴくっ
ぴくっ
ぴくっ
はーッ
はっ
はっ
はー♥
ぐちゃっ
ぐちゃっ
ぐちゃっ
プシャッ
プシャッ
ぴちゃっ
ぴくっ
ぴくっ
ぴく

それから、少し。散々出した先走りも、液体も、もう何も残されていない、もう何も吐き出せるものがない、そんなときだった。全身に電流が走ったような感覚、腰がガクガクと震え、今までとは比べ物にならない質量のある液体が、狭い隙間を押し広げながら通っていくのを感じた。目の前が真っ白になり、声にならない声をあげ、気付くと少年は絶頂していた。

びゅくびゅくと、今まで自らが放った透明な液体の水たまりに、白くどろっとした液体を放つ。その瞬間、少年の全神経がペニスに集約されていた。脳髄が甘く痺れ全身にまで響き渡り、少年は精通を迎えたのだった。

女がぱかりと足を開くと、むわっと独特の匂いがあたりにたちこめた。クリトリスは上向きにピンと張り、秘部がひくひくと動くたびにダラダラとはしたなく愛液が漏れ、女のどうしようもない興奮が伺えた。いつの間に破ったのだろう、大きな乳房を露にして、ぷっくりと立ち上がった薄紅色の乳首をくりくりと自分で弄りまわしている。女が卑猥な言葉で少年を誘う。匂い、仕草、赤く熟れたその身体全てが雄を求め、少年の熱をより昂らせていた。少年は知らずのうちにゴクリと喉を鳴らす。液体を垂らし収縮を繰り返す、見たこともない形をしたそこから目が離せない。女性の陰部を見るのは初めてで、自分のものとはまるで形の違うそれ。女の言葉はあまりよく理解できない。先程精通を迎えたばかりの頭はぼうっとして使い物にならなかった。誘われるままにフラフラと、少年は女に近付いていった。

少年は勢い良くその豊満な肉体へ飛び込んだ。胸に頭を埋めると少年の骨張った身体とは違う、女性特有の柔らかさを直に感じとることができた。ふわふわだ。顔をあげ、今度は恐る恐る乳房へ手を這わせてみる。手のひらを限界まで開いても到底包み込めないほど大きなそれは、少し力を込めると驚く程簡単に手をのみこんだ。少年は本能のままに乳房を揉みしだきはじめる。

息も荒く乳房を揉む少年は、無意識にカクカクと腰を動かし必死に女の秘部へペニスを擦りつけている。しとどに濡れた媚肉は熱くたまらない快感が少年を襲った。

もう少し、下？女の言葉の通りくちゅくちゅと水音を響かせながら少年は腰をさげてみるが、ペニスから漏らす先走りと女性の愛液のせいで滑ってうまくいかない。少年が快感と焦燥感で泣きそうになっていると、突然あの白い液体が出てきたときと同じ切羽詰まったような衝動を覚えた。

クリトリスとペニスを兜合わせのように卑猥な音を出しながら擦り付けた少年は、あっというまにガクガクと腰を震わせながら達してしまった。びゅくびゅくと溢れ出る精液は勢い良く女の秘部にぶちまけられ、じんわりとその熱さが広がっていく。少年は精一杯の力で女にしがみつき、その快感の波に必死で耐えた。心臓がどくどくと脈を打ち、息苦しいほどだ。全身が痺れたように動けない。しかし、未だ慣れるはずもない快楽に気怠く沈む身体とは裏腹に、柔らかい肉に抱かれ精を放つと、少年は今まで感じたことのない幸福感に包まれた。

やがて射精の勢いが小さくなり快楽の絶頂が徐々におさまると、少年はハッと正気を取り戻した。気付けば思考を支配していたペニスへのもどかしさはなくなっていたが、その代わりにペニスと女の股が自分の出した白い液体でべとべとになっている。羞恥心と衝撃に頭が混乱して、ついにはぐすぐすと泣きだしてしまった。少年は自分の出した液体で、敵とはいえ、女性の大事なところを汚してしまったことに対して酷く罪悪感を覚えたようだった。

少年は泣きながら謝罪を繰り返すが、しかし無意識だろう。熱に浮かされたような顔で、再びぐりぐりと勃起のおさまらないペニスを精液に濡れた女の秘部に押し付けはじめた。射精時の勢いはないものの少年のペニスはぴゅ、ぴゅと尿道に残った精液を絞り出すように漏らしている。少年はすでに、覚えたての快楽に溺れきってしまったようだ。女はそんな少年を優しく諭し、慈しむように頭を撫でる。

少年はぼやける意識の中で、女に言われた通り、腰をゆっくりと下げると、待ちわびたようにヒクヒクと震えるその媚肉の中へとペニスがのみ込まれていくのを感じた。蜜壺の中はヌルヌルと愛液で溢れかえり、うねりながらペニスをきゅうきゅうと締め付けてくる。少年との密儀で充分に濡れ柔らかくなったそこは既にふやけきっている。そんな女の官能的な蜜壺も、先程精通を終え、当然秘部への挿入も正真正銘初めて体験する少年は、その熱にただただ圧倒されるばかりだ。ペニスに絡み付いてくる熱さに、まるでそこだけが柔らかな炎に包まれているかのような錯覚に陥る。

ずちゅずちゅと激しく少年が腰を打ち付ける度に、女の愛液がほとばしる。少年はもう形振り構ってはいられなかった。熱い、熱い。この中であの白い液体を出したいとも。すればすぐにでも漏らしてしまいそうなそれを、少年が出さずにいられるのは、ただ只管にもっと奥へ、奥へと、確実に孕ませられるようペニスを突き入れようとする人間としての生殖本能に他ならず当然少年が意図してやっている行動ではなかった。

少年のペニスは、彼女が愛用しているバイブとは比べられないほど小さかったけれど、気持ちいい気持ちいいと涙を流しながら必死に腰を振るその姿は、彼女の庇護欲をかき立てられると同時に充分にエクスタシーをもたらした。

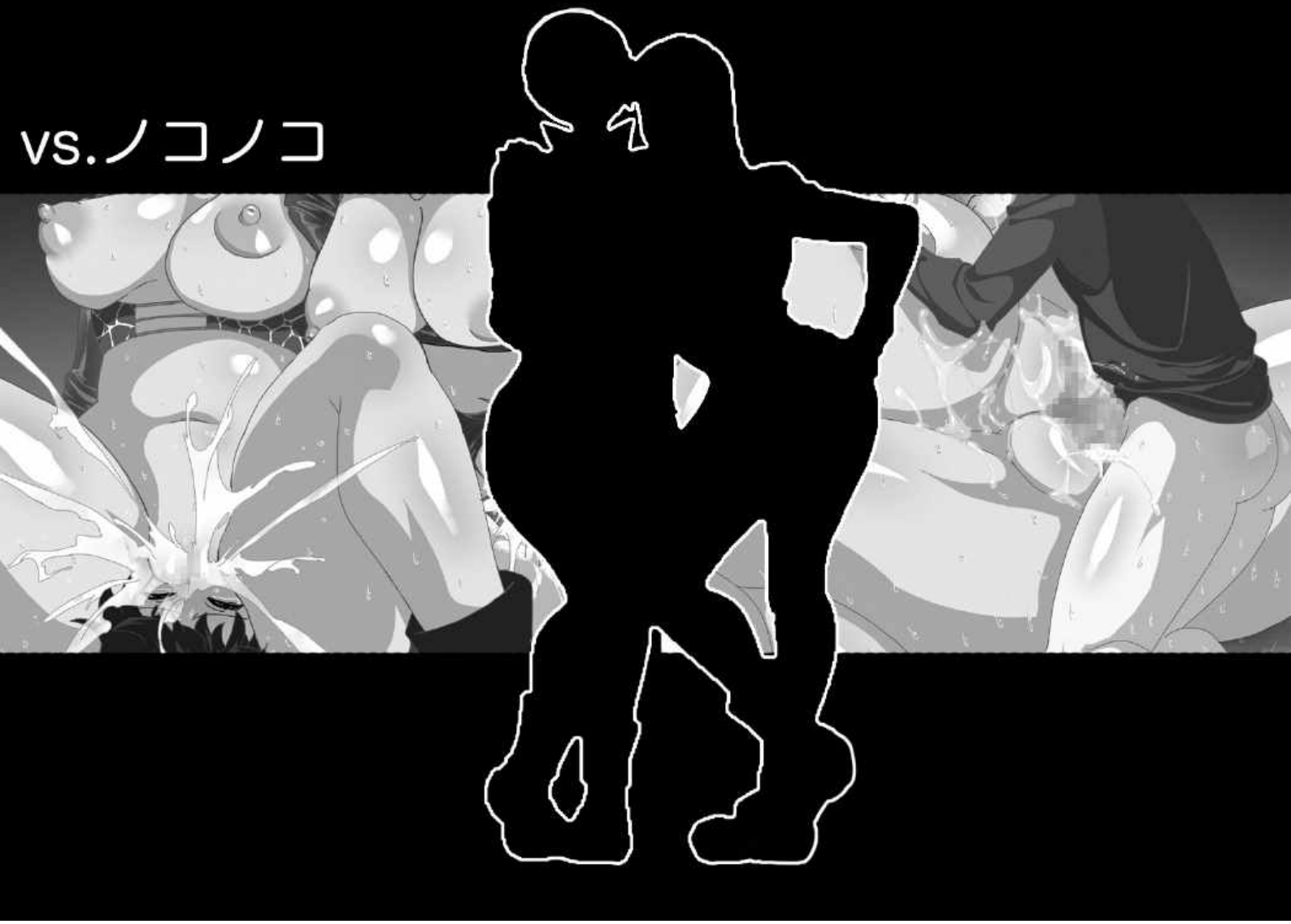
つまり、肉体的というよりも精神的な刺激であったが、彼女はそれでもアナルが濡れそぼり、床に滴り落ちる程の愛液を零すほどに感じていた。

ビュルッ
ビュルッ
ビュプ
ビュッ
びちゃ
びゅる
どぷ
どぷ
びくっ
びくびくっ
いいの♥いっちゃうっ♥
あたしの子宮に
ショタチンポザーメンいっぱい
ドピュッドピュッしてえぇぇっ♥
びくびくっ
ガクガクガク
ぷくっ
あっ♥ほぐほぐ!!!
まだおもらしちゃう♥
白いのぶちまけちゃうっ♥
びくびくっ
ぶぷっ
ぶぷぷっ
ぶぷぷぷ
ガクガクガク
ぶしゅっ
ぶしゅぶしゅ
ぶしゅぶしゅ
ぶしゅぶしゅ

みち。
ぴく
びくびく。
びく。
ぴく。
びく。
びく。
はあ。
みちぶ
あ…ぁあ…は、ひ…♡なんで…こんな、ぁ♡ひ、子宮いっぱいになるまで…中出し、されちゃったぁ…♡あひ、も…絶対あかひゃんできちゃってるよお…♡♡
はっ
あ。
はっ
あ。
はーっ、はーっ、ぁ、ぁー、はーっ、ふぁ、はぁーっ
あ。
あ。
ぐちゃ。
ぐちゃ。
びくん。
びくっ
はーっ
はーっ
はーっ
はっ。
はっ。
はっ。

ぶぴゅっ、びゅるっ
びゅるるっ
びゅっ
びゅびゅっ
びくびくっ
びくんっ
びくっ
ビクビク…ッ
あぁ…♥あぁっ♥
あぁ〜〜♥
ビュプッ
ビュルビュル〜ッ
ぴゅっ
びくっ
あんんあ、あっあっ
ひぁっ…♥あんっあっ
びくんっ
びくんっ
びくんっ
あ〜〜っ♥
ひっ♥あぁっあぁっ♥
あぁっあぁっ♥
あぁ〜〜っ♥
びくっ
びくびくっ
あ〜〜っ♥
あぁ〜〜っ♥
びくんっ
びくんっ
あ〜〜っ
あ〜っ
あ〜っ
あ〜っ
びくっ
びくんっ
ぶぴゅっ
びゅるっ
びゅっ
びくっ
びくんっ
びくんっ
びくっ
びくんっ
びくんっ
びくん

vs.ノコノコ



野を越え山を越え、草むらを進んでいたところ、突然少年の背後から何か硬いものが飛んできて、ドンとぶつかってきた。少年が何事だと目を開けると、青緑色の髪をしたモンスターが己の身体の上に乗っかっているのが見えた。緑色の女はすぐさま少年の短パンを脱がせると、自らもはいていたパンツをずらし陰部を露にした。少年は何が起きたのかわからず、ただ自分の性器がつぷつぷと女の股にのみ込まれいく様を見ていることしかできなかった。
のしっ♥
えへへ～、やっと捕まえました♡何度も避けられるから私、とっても焦らされちゃったんですよ。さぁ、お洋服脱いで、可愛いおちんぽ出してくださいね～♡わぁっ♡思った通り小さくてとっても可愛らしいです♡
え、？うっうわ、なに…っ！
あらあら、こんなに混乱しているのに、おちんぽは勃起してますね♡うふふ、えっちなモンスターたちと戦いながら勃起させてたんですか？それとも私のおっぱい見て興奮しちゃったんですか？どちらにしても変態さんですね～♡変態さんにはお仕置きですよ～♡♡
ひ…っ！や、やだぁーっ！
ぐぐ…
くちゅ…

草の青臭い匂いと汗の匂いが立ちこめる。上に跨がり、肉がぶつかり合うほど激しく腰を振り下ろしながら女は微笑んだ。所謂騎乗位の体勢で、女は下乳を腕で固定しながらも、豊満な両の乳房はその質量に抑えきれずぶるんぶるんと少年の頭上を揺れ動いている。女の中は締まりがよく、吸い付くように少年のペニスを包み込み、やがて濡音が混じりはじめた。それは女の愛液と少年の先走りが、膣の中で混ざり合ってあふれ出たものであり、女が自らペニスを奥へと突き入れる度にぐちゅ、ぐちゅと淫猥な響きをもって少年の耳に届けられた。

ふ、ふっ♡凄いですねぇ、君のおちんぽガッチガチです♡カウパーが私のおまんこの中でぴゅっぴゅしてるのが分かりますよ♡犯されて感じてるんですね～♡
ずっ
はぁ♡
はぁ♡
はぁ♡
ぷるん♡
ぶるぶる
ぶるぶる
ぶるぶる

一体何が起こったというのか。どすん！と少年の頭に衝撃が走るやいなや、彼は後頭部を強かに打ち付けた。途端、むわっとした汗と性の匂いが鼻孔に直接押し当てられ、それを自覚した途端に少年は射精していた。ペニスを頬張っていた女の蜜壷は脈打ち注ぎ込まれる精液を逃すまいとごくごくと嚥下していく。それでも重力に逆らえずゴボリという音を立ててこぼれ落ちるそれは少年の臍まで濡らしていく。

射精を終えた少年は、頭の上にあるそれが、下半身を露にした女の陰部だということに気がついた。クリトリスを少年の鼻に乗せ、そして開いた口には陰部がべったりとくっつけられている。顔面に女の秘部を押し付けられているという異常な事態に少年は混乱を極めていたが、蜜壷の中で震える性器はびくびくと騒ぎ、一度精を放ったとは思えない程に再び勃起していた。

へぇ…顔面騎乗で射精しちゃったんだぁ。何この少年、マゾなの？顔にマンコ押し付けられて気持ちよくなっちゃうなんてやらしーわぁ♡
そういうことなら、ほら、ぐりぐりしてあげるから、お望み通り口でマンコしゃぶりなさいよ。こういうのが良いんでしょ？
ん…あはぁ♡うわぁ、射精したばかりなのにもうおちんぽ硬くなりました♡私のおまんこで擦る度、姉さんのおまんこちゅぱちゅぱする度に硬くなって…♡あっ、あ♡すごぉい♡
んふ♡そんなにピンピンに勃起してるの？ムレムレマンコ、下と上で味わって感じまくってるのね♡この変態！ほらっ、いやらしい変態マゾ野郎に付き合ってやってるんだから、もっと気合い入れてマン汁吸いなさいよっ、ほら、ほらぁっ！
んんむーっ
むラっ
ぐりっ
ずちっ
ずちっ
ぐりっ
んんっ
ぐりっ
ぐりっ
ぐり

少年の下腹部に跨がっている女は、膣内に放たれた精液をぬちゃぬちゃと零しながら、激しく腰を打ち付け昂りを促す。また、顔面に跨がっている女もすでに興奮を隠さず、陰部をさらに押し付ける。大量の愛液がだらだらと少年の口に吐き出され、時折隙間からぴゅ、ぴゅと漏れだしている。少年がそれをこくり、こくりと飲み干していくのは、そうでなければ窒息してしまうほど湧き出てくるためだった。

精通したばかりの少年があられもない格好をした二人の女に押さえつけられ良いようにされているこの光景は、傍から見れば虐待で惨たらしいものだったのかもしれないが、少年は自分の柔らかで大事な部分を犯されていくことに快感を覚えていた。息苦しくて仕方がないのに、もっとしてほしい…という被虐的思考が少年の頭をよぎる。

ガチガチに硬く勃った小さいペニス、そして淫汁溢れる蜜壺におずおずと拙い動きで舌を這わせ始めた少年に、彼女たちも彼の興奮を知る。女性たちの動きがなお一層激しくなり、そして――ぐり

女たちの秘部から水しぶきがあがった。蜜壺から生温い、少し白濁している液体が噴き出してきたのだ。ぷしゃぷしゃと爆発するかのように潮を吹きまき散らし、彼女たちは絶頂した。

強烈な快感に、三人は息を荒げてその余韻に浸っていた。乳首がピンと立ち、蜜壷をうねらせる女たちの豊満な肉体は少年の上でビクビクとわき起こるオーガズムに身を震わせている。少年の下半身は自らが吐き出した精液と女の愛液と潮とでびちゃびちゃだった。女のオーガズムが終わってもなお、少年はドクドクと射精を止めることができない。達した直後で収縮する女の内壁がペニスを刺激しつづけ、それに抗うことなく精液は勢い良く子宮へと流し込まれていった。

少年はぷしゅぷしゅと顔に吹きかけられる潮を、ゴクリゴクリと喉を鳴らして体内へ受け入れていく。空気をとりこむことを許されている鼻でどうにか息を吸い込んだ。時折歯や舌が蜜口にあたってしまうと、更に大量の生温い液体が大量に口内に流れ込んでくる。強制的に嚥下させられ続け、喉が痛いくらいだ。しかし、女の蜜壷から出る潮が水鉄砲のように喉奥を震わせる度に、少年のペニスはビクビクと反応し更に射精をするのだから、彼は苦痛だけを感じていたわけでは決してなかった。髪や服にまで水を含み不快感をもたらすが、そんなことにさえ気付かないまま、少年は快楽の波にただ身を横たえている。

それから少年は、何度も強制的に絶頂へと導かれた。幾度目かの射精の後、ペニスが硬さをなくしても、女はすぐに根元まで陰茎をくわえこむと膣を収縮させ、勃起するまで決して抜こうとはしなかった。何度も顔に潮を浴びた少年の肌はふやけきってしまっている。嚥下を繰り返した口内は広がる味にも慣れてしまった。ぼやける意識の中で、時折正気を取り戻しては、その異常な事態を再確認しペニスから精液を迸らせ、そしてまた理性を失う、ということが少年の中で何度も起こっていた。

あぁぁぁ、こぼれる。尿道口まで来てる。
イイよっ出て♥浮気のケチまんこにおもらししてっ姉さんっ♥
あふれてるでるでるでる♥
おしっこもらひちゃう♥
おぉぉ〜〜ッッ
ぶびゅーッッ
ぶびゅっ
ぶびゅっ
ぶびゅっ
ぶびゅっ
ぶびゅっ
ぶるぶるっ
ぶるぶるっ
ぶるぶる

やがて少年を犯すことに満足したモンスターたちは、体勢を整えると揃って性器を少年の方へ突き出してきた。腰をいやらしくくねらせて、貝合わせのように互いの陰部を擦り合わせつつ少年のペニスを懇願する。

愛液を漏らす女は先程行った顔面騎乗だけでは満足できなかったのだろう、ペニスがほしいと腰を揺らしながらぱくぱくと陰部を開閉させている。

下敷きになっている女は逆に陰部をきゅっと引き締め、注がれた精液を零すまいとしている。しかし、上に乗っている女がくねくねと腰を振るのだから、合わさったクリトリスが擦れ沸きあがる快感はそのまま上乗りにされている女の上に寝そべる女も膣内に溜まった精液を滲みだしてしまっている。実際、上からぶっかけられてどうしてもこぼれてしまう。

散々良いようにその身体を弄ばれ、ふらふらしながらそれでも少年は何とか立ち上がった。今まで自分の上で好き勝手に動いていた女たちの陰部がペニスを求め淫猥に収縮している。その様は酷く蠱枠的なものに思えて、少年は本能の赴くがまま、引き寄せられるように近寄っていった。

ちょっ…ちょっと待って、姉さん！今くらい私に譲ってくれたって良いじゃないですか！

何言ってんのよっアンタはさっき沢山中出ししてもらったじゃない！アタシだってショタチンポザーメンほしい！

だって姉さん、いつもは私がどれだけ言ってもおちんぽ放さないじゃないですかっ！

なっ…そんなことないわよ、二回目はアンタにあげてるでしょ！

散々姉さんが絞り尽くしたあとで！殆ど気絶寸前の状態で寄越されても全然気持ちよくなれないんですよ！この子は駄目ですっこの子の精液は全部私のなんです！

何ですってえ！絞り尽くしたあとの楽しみを上げてたのに随分な言い草じゃない！このチンポはアタシのよ！

私のです！

私の！

アタシの！

アタシ！

ぎゃあ

大きな尻に顔を埋め、手のひらでその肉をわし掴んでみる。頬の下にはきゅうと窄まるアナルがあり、少年がむにむにと尻を揉みしだくとひくひくと喜んだ。女たちに言われるがまま、ペニスをそこに宛てがってみる。頭がぼうっとして、どこに挿入すればいいのか分からず判断がおぼつかない。

あぁっ♥
あぁっ♥や、クリトリスにおちんぽがあたって…っ♥
はっ♥
あっ♥
やっ、うそ、そんなとこに…っ♥
はっ♥
あっ♥
ぴくっ
ぴくぴくっ
ぴくんっ
ぴくぴくっ
ぴくぴくぴくっ
ぴくぴくぴくっ
ぴく

抜き差しを繰り返すたびにクリトリスがコリコリと硬さを増していく。時折カリ首に引っかかり、それを無理矢理ぷるんと引っこ抜くと、女の全身がびくびくと痙攣しオーガズムに達した。
きゃひいいいいっっ！あついっクリが擦れてあついのおおおぉおっ♡
だめえっ♡チンポでクリちゃんごりゅごりゅしちゃだめえええええええっっ♡感じすぎちゃうよおおおぉっ！
だめだめだめっ！びくんってっ♡おちんぽくるたびにビクビクってイってるからあっ♡あっあっザーメンこぼれちゃうっ！びくんってしたらザーメンおまんこから出てっちゃうからもうやめてええええええっ！
あっあっあっあっ♡イクイクイクっおっきいのくるうっ♡おまんこの中ずぼずぼされてないのにちっちンポでイっちゃうよおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！
女が絶頂するとクリトリスを覆っている包皮とヒダが激しく圧搾され、ペニスに絡みが持続する。そして、とくに少年も気は無意識のうちに抜き差しを繰り返すたびにクリトリスが硬くなっていく。時折カリ首に引っかかり、それを無理矢理ぷるんと引っこ抜くと、女の全身がびくびくと痙攣しオーガズムに達した。
潮を起こす。
精液をぶっかける。
豊満な身体を責め立てる。
ぱんぱんぱん

ぁぁぁぁ
プシャ
プシャ
ビクッ
ビクッ
ビクッ

vs.モンスター

青い空の下、道を進んでいくと見慣れた緑色の土管があった。飛び越えようとジャンプしたその時、土管の中から植物の蔓が縦横無尽に伸び、少年の身体をからめとり宙に浮かせると、歯を剥き出しにした花の形の化け物が姿を現した。蔓は少年を傷つけることなく、服をビリビリと破っていき、ツンと立つ乳首に蔓を巻き付けぎゅうと引っ張る。更に少年の下半身を露にさせた化け物は、彼の小さなペニスに蔓を絡ませると鈴口をその長い舌の上に向けた。人間の「体液」は、化け物にとって何よりのご馳走だ。

傍にある化け物の大きな口に、いつ自分が食べられてしまうのだろうと少年の心は恐怖でいっぱいだった。そんな少年を尻目に、化け物は一本の太いピンク色の蔓を土管の中から這い出させると、その先端の小さな穴から、どろりとした蜜を少年のアナルに向けて噴出した。尻にかかる生暖かい液体に少年は驚き身じろぎする。

化け物は蜜のかかった少年のアナルに太い蔓を宛てがうと、ズブリと一気に中へ突き入れた。少年は痛みを感じるよりも、未知の感覚にただただ恐怖し、涙を浮かべながらペニスからじょぼじょぼと小便を漏らした。勢い良く溢れ出てくる小便を、化け物は長い舌で受け止め美味しそうに味わっている。

ぶくぶくっ
ぶくぶくっ
ぶくっ
ぶくっ

おちんちんがじわっとあああ
ああ〜〜〜〜ッッ!!
じゃっじゃがあああ
あっひぃあ
お尻あっ〜ッ
びゅる!
ぢゅぷっ
ぢゅぷっ
ぢゅぷっ
ぢゅぷっ
ぢゅぷっ
ぢゅぷっ
ぢゅぷっ
ぢゅぷっ
はーっ
はーっ
はーっ
はーっ
はーっ
はーっ
びくっ
びくっ
びく

あっあぁ〜っ!!
やっ、もうやっ、
まだ、だめ〜っ
白いのでてっ
あぁ〜っ!!
あぁ〜っ!!
じゅぶっ
じゅぶっ
じゅぶっ
じゅぶっ
びゅっ
びゅっ
びゅ

少年が暗くじめじめとした地下道を恐怖心を振り切るように走っていた時だった。突然後ろから強い衝撃を受け、壁の傍まで転がったかと思うと、鋭い牙が少年の身に着けていた衣服を強引にはぎ取った。何事かと目を見張る少年を、透明な物体が包み込む。モンスターに捕らえられたことを知り、何とか手を伸ばして引きはがそうとするが、ぐにゅりとした感触を掴んだだけで到底抜け出せそうもない。

その内剥き出しになっていた少年のペニスを、かちみ吸い付くように厚い膜が覆ったかと思うと、射精を促すようにぐにぐにと動き始めた。と同時に、モンスターの尾の先が少年のアナルに入り込み、前立腺を圧迫する。柔く敏感な少年のペニスはすぐに兆しを見せ、先走りをぐちゅぐちゅと漏らした。

ぶちゅり、厚い膜を突き破り、少年のペニスから白濁液が飛び散った。少年の精液はモンスターの体内で、まるで水中で吐き出されたかのように勢いを抑え少年の目の前でゆらりと広がった。強烈な快感で目の前が霞み、涙をぼたぼたと垂らしながら少年は自らが出した淫靡な液体を見つめる。
…ッ！あ、あ、おっお尻…やぁっ
そこっそこやだあああっ！おしりの
奥びくびくってするのおおおおっ
やっやだやだやだやだあああッ！
あ、あ、あ、でるっでるでるでるッ
ちんちんから何か出ちゃうっ！
あ、あァ――ッ！
ひぐっぅ、
うあ、あああッ！
ああっあひっぃ…ッ
あ、あ、あっいっ…
おちんちんあついぃ…ッ！
びゅるっ!!
びゅくっ
びゅっ
ぬちっ
ぬっ
びくっ

勿論一度の射精では終わらない。モンスターは捕らえた獲物の、精の全てを絞り尽くそうと更に膜を激しくうねらせる。幾度目かの強制的な射精により少年の自我は早くも崩壊の兆しを見せ始めていた。

ぶぱっ
ぶぱっ
ぶぱっ

モンスターは少年の穴の、奥の奥の方まで尾先を押し込むと、先端に小さな穴を開けた。するとモンスターの体内で圧縮され漂っていた精液が、空気を求め一斉にその穴へ向かい、少年の腹目掛けて大量に噴き出した。

あっ、お尻のおくっ、もっと入ってきて…

!!?

すごっ、ごごごごごっ

ガッ、ビ、ラぞっ、やっやあ、あ、

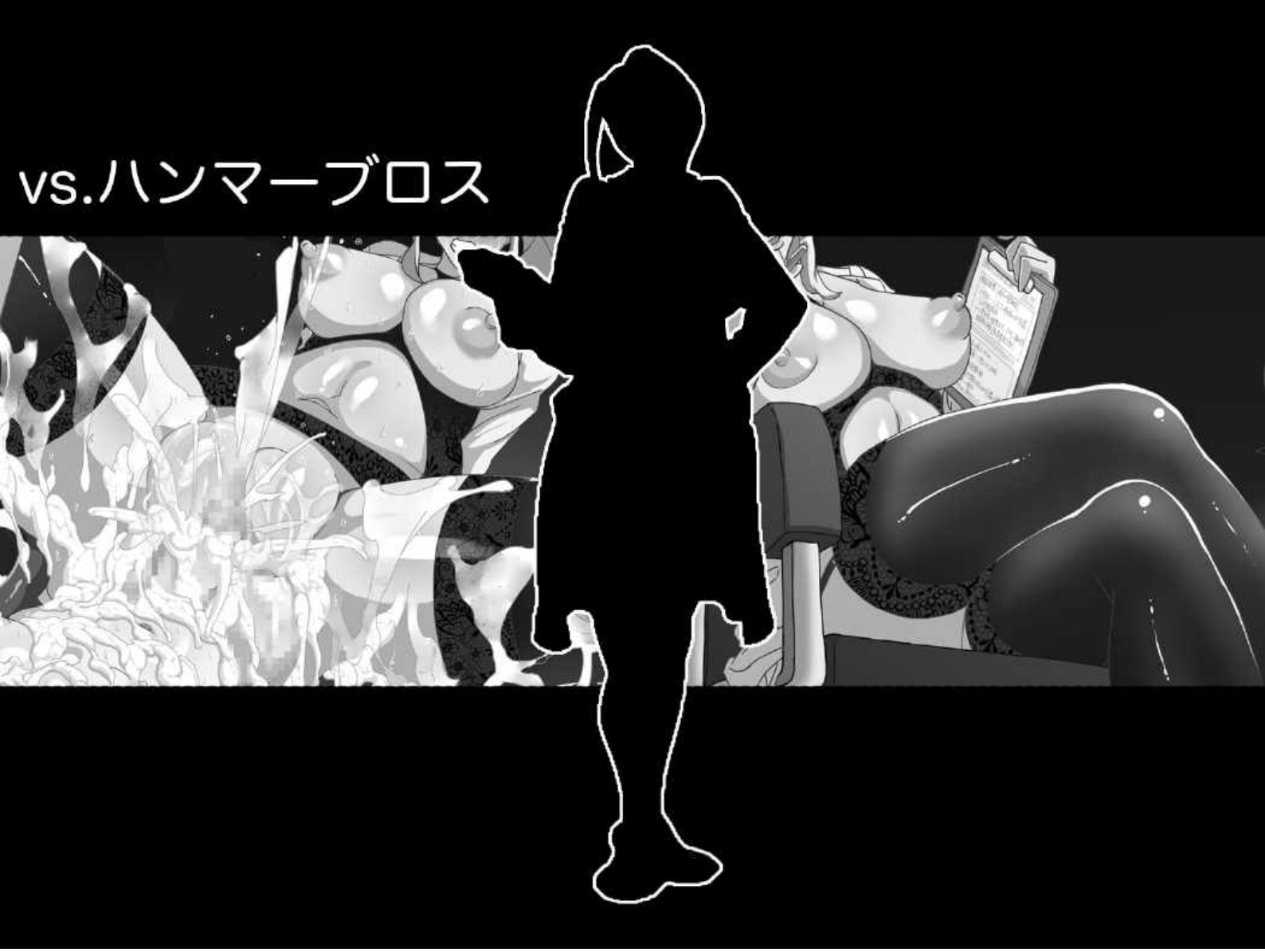
あ、あ、はっ、あ、

あ、あ、あ、

あ、あ、あ、

あ、あ

数分後、モンスターの体内から全ての異物が排出されたとき、少年の細い腹は少年自身の精液で妊婦のように膨れ上がっていた。大きくなった自分の腹に、耐えきれなくなってしまった少年は、とうとう失禁してしまった。当然漏らした小便も、精液でぎゅうぎゅうのアナルの中へ入り込む。後にはアナルからぶぴゅぶぴゅと自らの精液と小便を垂れ流す少年だけが残された。


vs.ハンマーブロス

少年は薄い意識の中で身を捩った。…身体が動かない。金縛りにでもあったかのようにギシギシと身体が軋む。はっと目を開けるとそこは異様な空間だった。暗闇の中初めて目にしたのは、真っ赤なハイヒールに嬲られて硬く上向きはしたなく汁を漏らす自身のペニス。突然のことに頭が真っ白になる。叫ぼうとするが何かに遮られてくぐもった声しか出せない。

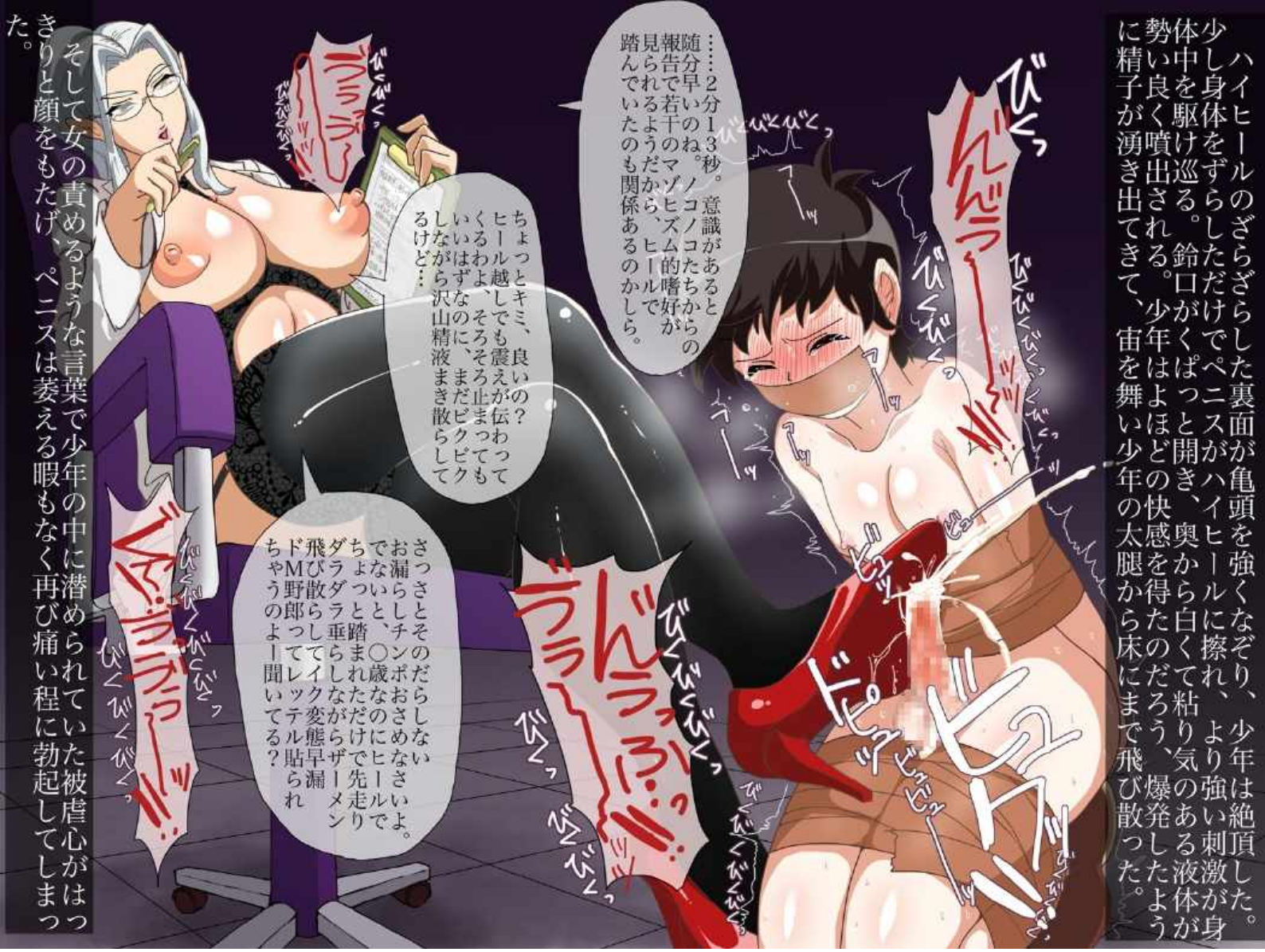
よく見ると腕と足はガムテープでぐるぐる巻きにされ身動きがとれなくなっていた。しかも身につけているのは靴だけで、その他は下着もなにもかもはぎ取られていた。

徐々に暗闇に目が慣れてきた少年がちらりと辺りを見渡してみると、冷たいタイルに覆われたその部屋はどうやら研究所のような様相を呈していた。

おかしい、確か自分は明るい陽の下で、ちょうど山を一つこえた先の草むらを進んでいたはずだ。そうだ、そこで何かが頭上に落ちてきて…。ぐるぐると記憶を辿っていると、ハイヒールの持ち主が声をかけてきた。

組んだ長い足の先でぐりぐりとペニスを弄ばれる。銀髪のモンスターは眼鏡を、そして白衣を羽織っていて、それらは研究者然としているが、その下のガーターベルトと、重量感のある乳房を惜しげもなく晒している。せいで全体的に痴女めいた格好になっている。椅子に座り、左手に持つ資料を見ながら淡々ともたらされる情報は少年のもので、しかし少年自身でさえ知らない事実だった。その間にも女は真っ赤なヒールを上下に動かしペニスを刺激する。亀頭は赤く充血し、先走りがぐちゅぐちゅと音を立て、ヒールの裏側をべったりと濡らすほどに溢れ出していた。

ハイヒールのざらざらした裏面が亀頭を強くなぞり、少年は絶頂した。少し身体をずらしただけでペニスがハイヒールに擦れ、より強い刺激が身体中を駆け巡る。鈴口がくぱっと開き、奥から白くて粘り気のある液体が勢い良く噴出される。少年はよほどの快感を得たのだろう、爆発したように精子が湧き出てきて、宙を舞い少年の太腿から床にまで飛び散った。


びくっ
ぶんぶんぶんぶんっ
びくびくっ
ぶるるる

女は何やらペンを走らせつつ、ぶつぶつと独り言を零している。一方少年は、快楽のおさまりがつかないのか、上向いて汁を垂らすペニスを持て余していた。ヒールでごしごしと半ば踏みにじるようにペニスを扱かれたあの、強烈な刺激がほしくてほしくてたまらないのに、真っ赤なヒールは動く気配を見せない。

ふぅん…？快楽には弱く一度射精してしまえば正常な思考をとれなくなる、ってのも報告通りみたいね

大体こんなところで私に足止めを食らってるようでは、『あの方』にとっても満足できるような人間ではないということよね…仕方がないわ、いつものようにサンプルとって、絞り尽くしてから……あら？

精液の量はそこら辺の子とは比較にならないくらい多くて魅力的だけど、何よりペニスが小さすぎるわ…せめて子宮口まで届くくらいの大きさじゃないと、私気持ちよくなれないのよねぇ

少年は我慢できなかった。気付くと少年は、拘束されて少しかし動かない身体を必死にくねらせて、ペニスをハイヒールの踵に擦りつけオナニーを始めていた。

女は深く考えた。

少年に押し殺した気の様子込んだ欲求性を気にいるとのような淫蕩な快感を身体の芯にもたらした。

そして、声をいんらんな少年たちの快楽のために、接享受する獣のように直接的な響き。

…そうだわ。昨日調合したあの薬…。人間相手はまだ実験したことがなかったわね。ふふ、試してみる価値はありそうだわ
まぁ！お行儀の悪い子ね。勝手に人の足を使ってオナニーするだなんて……それにしても凄い量だわ。とても二回目とは思えない…
……
ぶっ
ぶっ
ぶっ

寝起きのようなふわふわとした頭が現実に焦点を合わせたとき、少年は手術台のような、冷たいビニール張りの台に乗せられていた。足に巻かれたガムテープはそのままに、膝には鎖のついた拘束具がとりつけられ、天井から吊るされている。足を開かされた状態のまま身動きがとれない。更に、手術台に直接はめ込まれているらしい金属質の枷が手首を隙間なく押さえつけていて、到底外れそうもない。

ひ！ちゅ、注射…っ？

ぴくっ

ふふふ…じゃあ早速、と言いたい所だけど。アレは劇薬で、普通の状態で摂取するとモンスターでもショック死してしまう可能性があるの。だから人間のキミは、充分に快楽に慣らしておかないと危険なのよ

ぴと

というわけで、まずはこの、赤キノコから摂取して精力増強用に調合したキノコエキスよ。睾丸に注射するから、ちょっとチクっとするけど我慢しなさいね？

突然目の前に赤い液体の入った注射器が差し出された。冷たく鋭利な細長い針に反射的に身構え、少年は何とか抜け出そうともがく。しかし、注射器を見てもなお萎えることのないペニスが、その嗜虐的な行為への期待を表していた。

ぽてっとした柔らかい睾丸に針が刺さり少年は泣いて抵抗した。内部まで入り込んだ針から、冷たい液体が流れこんでくるのを感じる。意外なことに痛みは針の侵入を許した一瞬だけだった。
ガチャ
や…やだやだっ！怖いっ
注射怖いよぉおお――っ！
やだぁあああああああっ！
男の子でしょ、痛いの一瞬だからそんなに泣かないの。……はい、良い子だからそのまま動かないでねー、すぐ終わるから大丈夫よ
びくっ
ぴゅる。
ぴゅっ。
プスッ
いぎっ…！ひ、いいい…っ
ひくっ、ふ…ぁ、ひっ、あ…
びくっ
ん。はい、終わり。ね？チクっとしただけでしょ？大丈夫、すぐ気持ちよくなるわよ
びくっ
やがて麻酔を打たれた時とよく似た、ボワッとしたような痺れが睾丸からペニスにかけてじわじわと広がる。針に対する緊張感で知らず身体に力が入っていたのだろう、全ての液体を注入されると針が抜かれ、ほっと気が抜けた。しかし、変化はすぐに現れる。

熱い。性器の内側から熱が広がり、全身に汗が噴き出る。心臓はばくばくと音をたて、息が上がり肺が震えて呼吸もままならない。ドクンドクンとペニスの中心から打ち付けるような鼓動が伝わってくる。その鼓動が一際大きく芯を揺らした時、信じられない事が起こった。

あつ、い、は、ぁ、…っ！
う、うそ…ついやっ！
おちんちんがヘンだよぉっ！

あ、あ、あ、やっやだぁ、
ひ…っこわい、やだ、
やだよぉ…おちんちんが、
おっきくな…っ！

い、いや、あ、
あああっ

うん、上出来ね。皮もズル剥け、血管もばっちり浮かび上がってて素敵よ。先走りもダラダラ零して…はぁ、美味しそう♡でもアレを試すにはまだまだね…

睾丸がどんどん熱をあげて膨れ上がり、それから間もなくして、少年の小さなペニスに血管がビキビキと浮かぶ。少年は身に起こる異常な事態に声にならない悲鳴を上げるが、膨張は留まる所をしらない。やがて熱動が収まったとき、可愛らしかったペニスは、白くて細い発展途上の肢体に不釣り合いなほど大きくグロテスクなものへと姿を変えて聳えたっていた。元の大きさと比較すると二倍、いや三倍以上はあるだろうか。その中心を上向かせダラダラと先走りを垂らし、腹の上に影を落としている。

注射器を置いた女は、少年に向き直ると人差し指でつん、と巨大化したペニスの裏筋をつついた。作りかえられたばかりのペニスは敏感で、少しの刺激でも簡単に少年を絶頂へと導いた。体内で作られる精液も増え、夥しい量の液体が少年の腹を汚していく。

とりあえず、そのままじゃキミも辛いでしょう？一度射精しておきましょうか
うふふ、大丈夫♪ぐちゅぐちゅなんてしないわ、だって……巨大化させた直後なら指一本で気持ちよくなれるのよ？ほら
あらあら、凄いわ、こんなに沢山の精液…♡
やっ！やめでッッ！いまついまざわらないでっおちんちんぐちゅぐちゅしたらじんじゃうよおおおおおおおおおっ！
ドピュッ
ビュッビュッ
ビュッビュッ
ビュッビュッ
ひぃッッあ、ああ、ッッ
きぃぃぃ

射精は中々収まらない。それは少年にとって通常と同じことだったが、こんな風に薬で敏感になっている今は尚更だった。既に人間が一日に射精できるであろう限界量まで出しているはずなのに、鈴口から飛び出す精液は収まる気配がない。一瞬止まったかのように思えてもペニスに付着した自身の精液、びくんと震えた瞬間に触れるわずかな微風でさえも刺激になり、再び射精してしまう。

その様を痙攣しながらも呆然としたように見つめる少年を尻目に、白衣の女は玩具を用意するとスイッチを入れる。女の手の中で振動するペニスの形を模した紫色のそれは、裏筋に当たる部分に幾つかの丸い突起がついている。前立腺を確実にえぐり刺激するための、どちらかと言えば男性向けのものだ。女は何やらドロっとした、怪しげな液体をその玩具の上に垂らし、全体になじませるようにたっぷりと惜しみなくかけていく。

女はひくひくと震える少年のアナルに玩具を宛てがい、薄紅色の液体を塗りこむように先端を数度擦りつけると、一気にそれを押し込んだ。女のかけた液体が潤滑液の役割を果たしたのか、射精の快楽により幼い身体が弛緩していたことも手伝って、えげつない大きさの玩具をすんなりとその身の内に沈めていく。肉壁を抉りとるようにぐねぐねと跳ね、媚薬が内肉を通して染み込む。

うふふ、アナルがひくひくしてるわよ。そんなにこのバイブがほしいのね？男の子なのにペニスが欲しい淫乱なキミには、お望み通り一気にイれてあげるわ…よっ！
ズプッ
ビュッ
ぶちゅっ
ぶちゅっ
ぶちゅっ
ぶちゅっ
あっ
ぶるぶるっ
ぶるぶるっ
ぶるぶる

快感にえずき、まともに声も出せないどころか、呼吸もままならない。収まらないエクスタシーにひはひはと喘がされ涙を止めようとしても止まらずにしゃくり上げる。それもそのはず、少年は○歳にして精液の存在すら知らなかったのだ。こと快楽面においては、限りなく純真で、清らかでまっさらで無垢な赤ん坊と同じだった。

よし…と。ふう、準備ができたわ。一滴でも肌に触れたら大変なことになっちゃうのよね、これ。

うふふ、何だかわかる？キミがいつも使ってるスター…キラキラしていて綺麗よね。採取するのに苦労したわ。私たちにとっては死の象徴だから。でもおかげで素晴らしいものができたのよ。

これが完成したとき、試しにメスクリボーの右腕に垂らしてみたの。ふふ…あのときのことを思うとまだゾクゾクしてきちゃうわ。右腕をね、ペニスみたいに左手で扱いて一晩中絶頂しつづけたのよ…あまりに擦るから右腕が赤く爛れてしまうほどにね。

皮膚に垂らすと瞬時に吸収されてしまうのね、水で洗っても効果は途切れなかった。薬の開発に成功した私は、本格的な実験として更にクリボーのクリトリスにたっぷり垂らしてみたの。ふふ、水と食料だけ与えて三日間放置してみたわ。ふふ、ふふ、どうなったと思う？

うふふ…完全に狂ってたわ。目は虚ろで指一本動かせない。掠れた声で絶叫して床に転がりながら、肥大化したクリトリスが痙攣して絶え間なく潮吹きしてた…はぁ、彼女を観察しながらのオナニーは最高だったわ……♡でも、人間に投与したことはないの。もしかしたら、あの時よりももっと…うふ、うふふふ…期待、してるわよ♡

そんな少年が、薬で無理矢理快楽を刻まれもがき苦しむ様はなんと官能的なことだろうか。白衣の女は自分の異常性を自覚しながらも子宮が疼くのを止められない。陰部から愛液がだらだらと溢れてくる。射精はまだ止まらない。頭に血がのぼり、汗と涙がぼたぼたと頬を濡らし落ちる。意識が朦朧としているようだ。頃合いだろう。女は再び注射器を取り出した。金色に輝く液体に触れないよう、細心の注意を払い、睾丸に針を刺す。少年はもう、注射器に怯える余裕もないようだった。

絶叫がビリビリと空気を震わせる。それは針を刺して注入している傍から瞬く間に効果を見せた。片手で全体を包み込めてしまう小さな睾丸が、爆発してしまいそうなほどパンパンに膨れ上がり、腹の上まで大きくなっていたペニスが、更に質量を増して、少年の胸のあたりまで肥大した。元の大きさの何倍にも膨れ上がり面影もない。

光を失った少年の目が、真っ赤に充血したペニスの先から精液が噴火したように噴き出すのを映す。しかし少年はもう、それが自分のものであるとは分からなかったし、最早その物体が何なのかさえも焼き切れた脳では理解することができなかった。意味を持たない叫び声が辺りに木霊する。

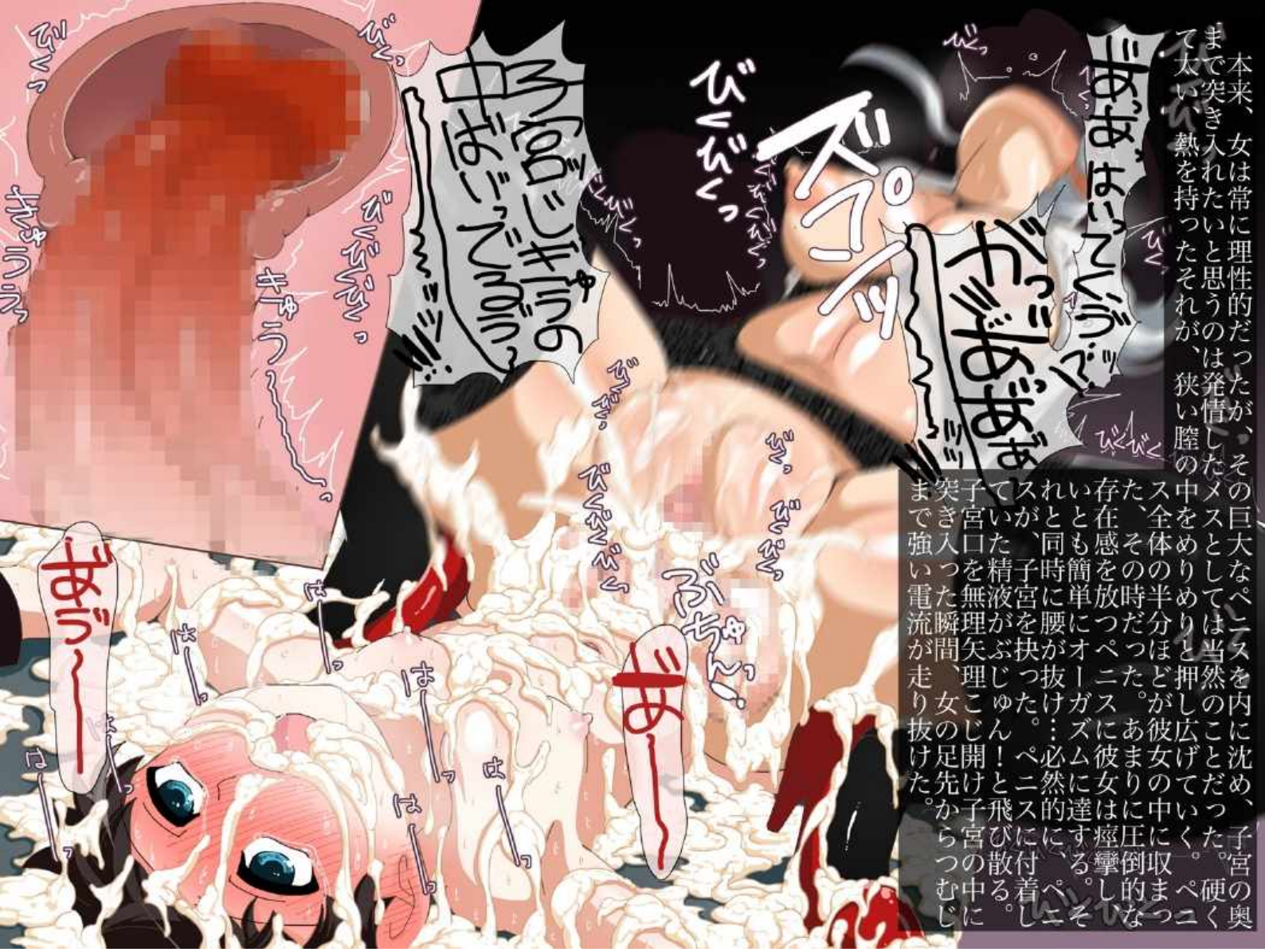
……っ！お、大きい！なんて素晴らしいの……っ！こんな大きなペニス見たこともないわ！それにこんな大量の精液……っはぁ、はぁ……やぁ、やだ、子宮が疼いてたまらない……っ！
あぁっ、うそ、あっあぁ――っ！……ふ、ぁ……こ、この私が……見ただけで、絶頂するなんて……♡こ、こんな大きいの……挿入したらどうなるのかしら……？
あ、ぁ、触ってないのに……っ子宮がびくびくして、あ、ああ、あっひ、ひあああっあんっ
ブビッ
ビキッ
ビキッ
ビキ

少年の頭上を越えて飛び散る精液が周囲を汚していく。噴水のように射精する様を見て白衣の女は満足した。しかし、何やら様子がおかしい。最後に注射してから射精が5分以上続いているのだ。女性と違い、男性はどれほど興奮が続いたとしても、体内に溜めておける精液には限りがあるため、いずれは打ち止めになるはずだ。そもそもこの少年はもう何度絶頂した？いくら薬で精力増強を促していても、人間が射精できる量はとっくに越えているはずだ、では何故…まさか。体内中のタンパク質を精液に変えている…？有り得ない話だが、あの液体は人間に試したことのない未知の薬だ。人間の身体に存在するタンパク質は全体の二割程…

少年は薄れる意識の中で思った。死にたくない。しかし身体は動かない、このまま何もしなければ本当に死んでしまうかもしれない。少年はぼんやりとした頭で、それでも必死に生きたいと願った。出来る限り頭部を起こし自らの亀頭に口をつけた少年は、あろうことかそのまま溢れ来る精液を吸い飲み始めた。とにかくこの溢れ出てくるものを体内に戻さなければ。全ては少年が持つ生存本能の為せる事であった。
し…んじゃう…？いやだ…しにたくない、ぼくは、ぼくはまだ…っ
ぶるぶるっ
ぶっ
ぶぴゅっ
ぶぴゅっ
ぶぴゅ

それからしばらく。薬のせいで馬鹿みたいに限界を超えて射精していた少年のペニスは一応の収まりを見せているが、あたりは凄惨たるものだった。深緑色をした手術台はそれとは分からない程白で埋め尽くされており、少年の身体にも大量の精液がまとわりついている。

ギシ…。白衣の女が手術台の上に乗る。彼女は発情しきったメスの顔をしていた。成熟しきった肉体をくねらせ、少年の上に跨がったかと思うと、射精を終えてなおそそり立つその雄々しいペニスに陰部を擦り付ける。

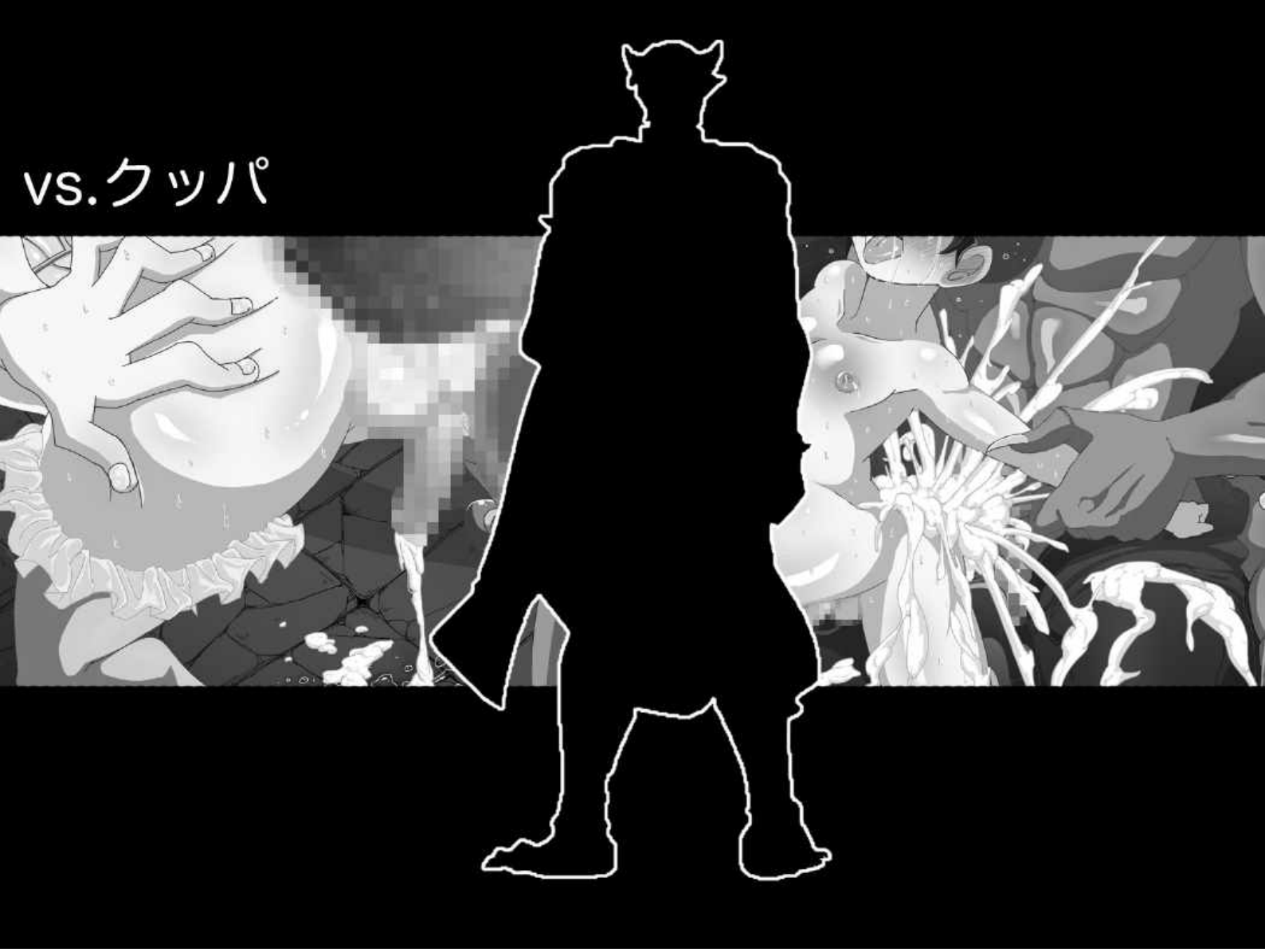

本来、女は常に理性的だったが、その巨大なペニスを内に沈め、子宮の奥まで突き入れたいと思うのは発情したメスとしては当然のことだった。硬くて太い、熱を持ったそれが、狭い膣の中をめりめりと押し広げていく。ペニスとしてはいい存在感を放つペニスが彼女の中に圧倒的な攣縮を繰り返す。そして、全体の半分ほどが抜けかけた瞬間、理性が矢ぶっ飛び、子宮口を無理やり抉じ開けて子宮の中に精液を注ぎ込む。同時に腰がガクガクと痙攣し、全身が痙攣する。子宮の奥まで強い電流が走り抜ける。
あぁ、はいってくぅ
がっぐぁぁぁ
ズプッ
びくびくっ
子宮じゃの中ぉぉぉ
びくっ
びくびくっ
きゅう
びくっ
きゅう
びくっ
びくっ
びくっ
びくっ
びくっ
びくっ
びくっ
ぶちゅっ
あー
はーっ
はーっ
はーっ
はーっ
はーっ
あぅー

奥ッ奥あいのあイクイクイクッ
潮吹いちゃう
んほおお
んあ〜〜
あ〜あぅ〜
ゴリ..
きゃん
きゃっ
きゃ〜〜〜

メスとしての本能に従い、女は必死に腰を上下に動かし精を搾り取ろうとした。が、巨大なペニスは一ミリの余裕もないくらいに蜜壷の中にぴったりとはまり込んでいて、その上あまりに強烈なエクスタシーにより上下に揺さぶることなど到底できず、腰を回すことすら困難だ。少しでも動けば絶頂してしまうため、今度は腰を動かさず内部を意識して膣に力をいれる。余計に熱が昂り再び絶頂してしまうが、自身がオーガズムに達するたび少年のペニスがビクビクと脈打つのを、女はようやく気付いた。女は更に膣に力をこめると連続で達し続け、やがてぎゅうぎゅうと力強く締め付ける秘肉に、どくんと少年のペニスが脈打ちそして

ぎゃあああっ
ごがれるうう
子宮の形がわかっちゃうう
ビュビュ
ブピュッ
ビュッ
ビュブッ
ビッ
ぎゅう
ぎゅう
ぎゅう

vs.クッパ



長い長い旅路の末、少年はついに姫が囚われている城へと辿り着いた。襲いかかる火の粉を蹴散らしながら進んでいくと、玉座に一人の男が座っていた。

「ガハハ！とうとうここまで来たか、マリオよ」

男は鋭い眼光で少年を睨み襲いかかってきた！血肉迸る激闘の末…

しかし少年は負けてしまった。

気絶していたのだろうか。少年は目を覚ますと、服をはぎ取られており、下腹部にとてつもない異物感を覚えた。腹が膨らんでいる。先程少年が戦っていた浅黒い肌の男が背後に座っていた。玉座の上に深く腰掛けている男はなんとその雄々しいペニスを少年の後孔に挿入している。しかし大きすぎて少年の内には収まりきらないようだ。

少年は敗北を悟った。悔やんでも悔やみきれない思いで少年は涙を流す。少年は自分が何をされているのか分からなかったが、人としての矜持を辱められていることは確かだった。

ク…そうだ、ペニスを扱くだけではつまらんな。女のように胸だけで絶頂してみせろ
い、たっ！い、痛いっ、やだやだっ触るなぁー！
なに、難しいことはない。今だって我が輩のモノを突っ込んでいるだけで先走りが溢れ出しているではないか。貴様は雄ではない、根っからの雌だ。配置されているモンスター達は皆サドっ気のある奴らばかりだったろう？
くあっ、ふ…ぷっ！な、何を意味の、ふ、分からないことを……くううっ！
ぐにゅっ
みち、
みち、
ぴく、
ぴく、
ぴく

男は遠慮なく強い力でぐにぐにと少年の肉がついていない胸を揉んでいるが、赤くぷっくりと立ち上がる乳首には触れようとしない。緩急をつけずに、出ない乳を搾り取るかのように乳首の周りを刺激している。その内に少年の白い肌が赤みを増し、少年は頭がぼうっとしたような、妙な感覚に陥る。息は段々と荒くなっていき、ペニスの先からは絶えず先走りが滴り落ちた。

少年は自分の身体に起こっている変化に頭がついていかない。背後の男に弱みを見せまいと、必死に口を噤むが、時折男の長い爪が乳頭に触れると、耐えきれずにより高く甘い声をあげた。

そして、男の指が赤々と色づく乳首をきゅっと摘んだ途端。少年の背筋に冷たいものが走り、ついで熱が灯ったように全身に火がついてびゅくびゅくと精を吐き出した。小さなペニスを震わせて、質のよさそうな玉座の座面を白い液体が汚していく。あまりのことに一瞬、息が止まる。

顔が熱くなり、細い身体がビクビクと痙攣し、男のペニスへ絡みつくように内壁が蠢いた。これ以上入らないと思われたのに、ず、と少しだけ男のペニスが奥に進む。未知の感覚に少年は涙を流して耐えることしかできない。その間にも男はくにくにと、少年の敏感な乳首を転がしたり、押しつぶしたりと弄んだ。

少年の乳首は痛々しいほど赤々と染まっていた。男は手を離すと、再び少年の腕をぐいと引っ張り一気に怒張したペニスを奥へ突き入れた。射精の快感で緩まっていたそこはすんなりと男のペニスを受け入れ律動がはじまる。

男のペニスは少年のものとは比べ物にならないほど太く、長く、たくましかった。座ったまま腰を器用に動かして最奥を突くとそれに伴いペニスの形が分かる程に少年の腹が出っ張る。怒張した男のペニスが前立腺を抉り、奥へと突くたびに少年は絶頂した。ぐちゅぐちゅと濡れた水音が響き渡る

腰を打ち付ける男の律動が徐々に激しくなり、一際奥へと突き入れたときだった。少年の腹に熱いものが広がる。夥しい量の精液が体内へ流れ込んできたのだ。内に受け入れきれず溢れ出てくる液体が割り開かれている尻にかかるのを感じながら、少年は思った。これは暴力だ。人としての尊厳を土足で踏みにじり、昂りで思考を捨てさせ力づくで服従させる卑劣な行為だと。ここで自分も精を吐き出してしまったら、今まで守っていたものが全て崩れ落ち粉々に砕けてしまうような気がした。　腹の中でドクドクと零される精液は、直接ペニスへ響くような強烈な快感をもたらしたものの、なけなしの理性で少年は何とか射精を止めることができたのだが――

…体内に直接注ぎ込まれる精液が少年の限界を越えても、男の射精が止まることはなかった。巨大なペニスと後孔の間にそれほど余裕がある訳でもなく、隙間から精液を逃がすのには限度があった。女性の膣であればそれでも子宮を満たすだけで済んだものの、少年はそうでなかった。つまり行き場を失った精液は当然、最奥の、その奥へと。

あぁ…おなかぁ…ぱんぱんだぁ…
どぼぼぼ

少年が囚われて数日が経った。冷たい地下牢の中で毎日アナルを犯された少年は、すっかり男のペニスの虜になってしまった。ピンクで淫らに腰を振り、女子用の服を着せられて誘惑するような姿は、数日前とは比べ物にならない程格好良くなっていた。乳首も別人のように隠せるほどに繋がる、ペニスを晒すのは恥ずかしくて垂れ下がる、男のペニスをねだりながら、アナルを割り開く。

ぁ……んっ！あ、はぁ…っ大きい…♡
先走りをこんなに垂らして…まったく、いやらしい奴だ
あっあ…っあふ…っは、はやくぅ、おちんちんじゅぼじゅぼしてくらさい…っ♡これ以上お尻のあなずりずりされたらっ、それだけで白いおしっこでちゃいますぅ…っ♡
ずり
ずり
ずり
ぴくっ
ぴくっ
ぴくっ

散々焦らされ、ついに硬く熱い男の怒張が蕾に焦点をあてる。ぷ…と殊更ゆっくり奥へ入り込んでくるペニスは内壁になじみ、待ち望んだその甘い痺れに少年は、耐えきれず軽く達してしまう。先程漏らした先走りの上にぴちゃっと精液がしぶきをあげる。

ペニスの半分ほどが収まるところで、少年は知らず止めていた息を吐き出し、挿入されたように尻をひくつかせる。開くしびれる。自ら気持ちいい。の手入力がこもる。男はひらすら惚の表情を浮かべる少年を一瞥すると、動きを止めるようにいい体勢を整えた。

ああぁっ、はあっ！はぁっあ！お、おちんちんっ、おちんちん気持ちいよぉ…っ！あっあっあっ♡あっ、あうぅっあんっ♡
もっと、もっとおちんちん欲しいよぉっ、くっぱさま、くっぱさまぁっ♡もっと奥まで、奥までいれてくださいっ♡
あっあう、奥までぐりゅぐりゅして、ぼくのびくってなるところに、ふんんっ、いっぱい白いのかけてくりゃさいいいっ！きもちいけど、びくびくってできないのぉ、白いおしっことろとろってなって、びくんってでないのおぉ…っ！
ずぷっ
ぐぷっ
ぶちゅ
くちっ
どろっ
とろ——っ
元男はその日珍しく、ペニスを根深くまで挿入せずに浅い抽挿を繰り返した。届かないもどかしさに耐えかねて、ペニスを根ほしそうなそれを咥え込んでいる。ロ丸ごと口内を快感に押し潰されそうな思いで、精液を搾り取ろうと、少年は懸命に奉仕する。ロ内の壁を擦り、先端にまとわりつく。男の動きは次第に速くなっていく。

あ〜ぼっぼくもまだ
ちんぽ様のおちんぽ
ちんぽっ♥
白いおしっこ
おもらししちゃう
よぉぉ〜♥
びゅっ
びゅるーっ
びゅくっ
あっ
どぴゅっ
どぴゅっ
びゅっ
びゅっ
び

アナルの中で震えるペニスの脈動が少年の小さくなったときには、もうぽっこりと膨らみ、入りきらなかった精液帯が結合部から溢れ、震えながら見つめている。ガクガクとしてるア

ぁぁぁぁ…ぁ…ふぁ…
はぁ…きょうも、くっぱさまの…♡しろいおしっこがいっぱい…♡どぴゅどぴゅ、あつくなって、びくんびくんってなっちゃいました…♡
クク…これが姫を助けだす英雄だとは到底思えないな。今日はもう少し遊んでやろうか
はぁ♡
はぁ…♡
はぁ…♡
はぁ…♡
はぁ…♡
はぁ…♡
ぴくっ
ぴくっ
ぴくっ

おい、腹に溜まった精液をここで全て吐き出してみせろ。手を使うことは許さん。それが出来たらもう一度、我が輩のペニスを与えてやっても良いぞ？

ふぇ…？そ、そんな…手がだめならどうやって…

排泄するときのように力めばいいだけだろう。それすら分からない程馬鹿になったか？

チッ…まだ理性が残っていやがったか

え、え、やだ、そんなの恥ずかし…え？な、何で僕……っ？あ、あ、あ、あ、あ、どうして、ぼく、ぼく姫様を助けにきた筈なのに、こんな…っ！

はっ…

ぴくっ ぴくっ ぴくっ

少年は再び硬く勃起するペニスを目の前に突き付けられた。

「選ばれし少年思わず開かれた身体快楽を追い求めるこの植物

男は戸惑いながらも、根負けするように口を開く。

「ア、何かが込み上げてくる。

ナルホドこれが射精か。

宛がわれた肉棒を入れられる。

足を切り裂くような痛みに顔を歪める。

裏切られたと思ったのは一瞬。

逃げようとするが、拘束具に手足を縛られ、逃げられない。

ペニスを受け入れる。

少年は、ペニスを咥え込んだ。

亀頭を包み込む。

先端から根元まで、ゆっくりと、ねっとりと、舐め上げる。

張り詰めた亀頭を少年は、口の中で転がす。

舌先で、尿道を抉る。

ビクンッ！

思わず、腰が跳ねる。

奥まで、飲み込む。

喉の奥に、亀頭が当たる。

苦しい。

涙が、溢れる。

命令されるがままに、口を開く

じゅぼじゅぼっじゅぼっじゅぼっ
自我など捨ててしまえッ
二度と口答えしないように
しっかり種を植えてやる！
ぶびゅるーっ
びゅっびゅるーっ
びゅっ
びゅっ
びゅ

男は精液を全て出し切る寸前で素早くアナルからペニスを引き抜くと、少年の尻に満遍なく残りをかけた。その薄い腹をはちきれんばかりに精液で満たし、まだ皮膚すらも精液まみれにすることで、内も外も全てに犯したように。二度と歯向かうことのない少年のものなのか男のものか、判断がつかないほどの夥しい精液が床にべったりと落ちし溜まっていた。

熱い液体が、丸く弧を描く肌の上を滑って、冷たい床に滴り落ちる。ひくひくと震えるペニスを根元までぱっくりと開きたまま、今や完全にアナルは収縮をしている。ニヤけた顔が覗かせ、吐き出された精液が溢れてきてくるようだ。

男が再び同じ命令をすると、少年は戸惑うことなく腹に力をこめて精液を溢れさせた。尻穴から完腸されたように精液を噴出される姿は、ひどく無様で滑稽で、そして淫らだった。

少年は何がおかしいのか、へらへらと笑いながら醜態を晒している。今度こそ満足した男は、笑いながら放置して地下牢を出ていった。

それからまた、数日後。
少年は異様なコスチュームを身につけ、地下牢の中で四つん這いになっていた。安っぽいポリ塩化ビニルで作られた濃いブラウンのロンググローブとロングブーツ、娼婦が着るような透けたキャミソール。頭には犬耳が着けられ、それと同じ色の尻尾付きバイブがアナルに挿入されている。バイブは少年のアナルにギチギチに詰まっていて、既に二度の中出しで今にも溢れ出しそうな精液を塞き止めている。
バイブの振動で尻尾がゆらゆらと揺らされ、ペニスが欲しいと涎をたらし、小さなペニスから先走りを漏らしながらおねだりする姿は、その格好も相まって発情した犬そのものだった。

男は少年にゆっくりと近付き、先程射精を終えたばかりのペニスを少年の口元へ差し出した。赤黒くぎらつくペニスを目の前に翳されると、少年は目をきらきらと輝かせて、満面の笑みでへばりついた精液を丁寧に舐めとっていく。

どろりとして苦みのあるそれは、少年にとって何よりも美味しいご馳走に感じられた。舌で裏筋を大胆になぞるとびくびくと震える、この熱い固まりが愛おしくて仕方ない。少年にとって快楽の象徴たるそれを舌で感じ昂ったのだろう、少年の小さなペニスは先走りを勢い良く噴き出しまき散らした。

ペニスを機嫌良くぴちゃぴちゃと舐めしゃぶっていると、少年は腹の下がむずむずするのを感じた。たぷたぷと揺れる精液腹に意識が向いていて気付かなかったが、膀胱がふくれて今にも決壊しそうだ。数日前、男の前でそれを我慢していたら小便を漏らしてしまい、仕置きだと、以前とは違い玩具すら与えられないまま放置された。

少年の身体はもう、男のペニスなしでは生きられなくなってしまっていた。激しくアナルを打ち付けられ前立腺を抉る感覚と、奥に注ぎ込まれる大量の精液だけが少年を天にも昇るような快楽へと導いた。その夜は眠れなかった。自分でアナルを弄っても、腫れるまで壁や床にペニスを擦りつけても満たされない。精液が欲しくて欲しくてたまらなくて、仕舞いには前日に腹の中から出した精液を這いつくばって舐めながら達したのだ。しかし、床の上でカピカピに乾いた精液を明かしたあれは、まさに地獄だった。それでも足りなくて、泣きながら冷たい床に転がり夜を明かしたあれは、まさに地獄だった。それ以来尿意をもよおすと必ず男に断るようにしていた。

少年は男の了承を得ると、服を汚さないように片足をあげた。先走りを散々漏らしていた小さなペニスは緩く立ち上がっている。犬が小便するときのようなポーズで淫らにおねだりをし、自分の主とも言うべき男に排泄すらも許しを乞わなければならないというのは、なんと恥ずかしくも甘美な刺激だろうか。男の視線を受け、羞恥と快楽に震えながら、少年がいつものように下腹に力をこめたそのとき――

なっなんで白いおしっこが出るの…っ？とめなきゃ、くっぱさまに怒られちゃうっ、はやく、はやくとめなきゃっ
ぶっ、ぶっ、ぶっ
ぐ…ぐぐぐぐぐ…
ぶっ、ぶんっ！
びゅるっ
んんんっ！やっ、どうして…っ
びゅくっ
びゅーっ
びゅっ
びくっ
びくびくびくっ
びくっ
びくっ
び

あう、ひっ…とまらな、とまらないのお…っちゃんとおしっこ出したいのに、白いのしか出てこないよぉ…っひぐ、うええええええっ
ごめんなざっ、くっぱさま、おしっこでなくてごめんなさいっひっく、ひっ、ひっ、みすてないでくださいっ、おちんぽおあずけしないでくださいいい

夢中にはなった。

少年は、自分の意思とは裏腹に、口内を犯される快感に、思わず涙ぐんでしまった。

喉の奥まで、ペニスを押し込まれて、苦しくて、吐き気がこみあげてくる。

でも、少年の口は、ペニスを離さない。

少年は、必死に、口を開けて、ペニスを受け入れようとする。

少年の口は、ペニスを、ぎゅうぎゅうと、締めつける。

少年の口は、ペニスを、ぐちゅぐちゅと、舐めまわす。

少年の口は、ペニスを、ずぶずぶと、飲みこんでいく。

少年の口は、ペニスを、ぬぽぬぽと、吸いつくす。

少年の口は、ペニスを、ぬぷぬぷと、しゃぶり

ぶびゅっ!!!
びゅーっ
びゅっ
ぶんっ
びゅっ
びゅっ
びゅ

ククク、やれば出来るじゃないか。ああ、折角栓をしていたのに外れてしまったな。明日までにちゃんと掃除しておくんだぞ
ずる
ゲホゴホッ
ゲホッゲホッ
ゲホッゲホッ
ゲホッゲホッ
ぶっ
ぶっ
ぶっ

vs. ? ? ?

は、激しく燃え盛る炎の中。死闘の末、とうとう魔王を打ち倒した少年は城の奥へと進んだ。薄暗くじめじめとした通路を抜け、ついに最後のドアを開けると、ばっと何か柔らかいものに包まれた。顔をあげるとそこには美しい女性がいた。ふわりと柔らかい金の髪、可愛らしい桃色のドレスに身を包み、息を吸えば暖かいお日様の匂いがした。間違いない、長く苦しい戦いの果てに、姫様だ。二人は固く抱き合い喜びあった。ようやくこの美しい姫を救い出すことが出来たのだ！少年はぎゅっと力を込めた。涙を浮かべて姫を抱きしめる腕に込めた。最高のハッピーエンドだ。

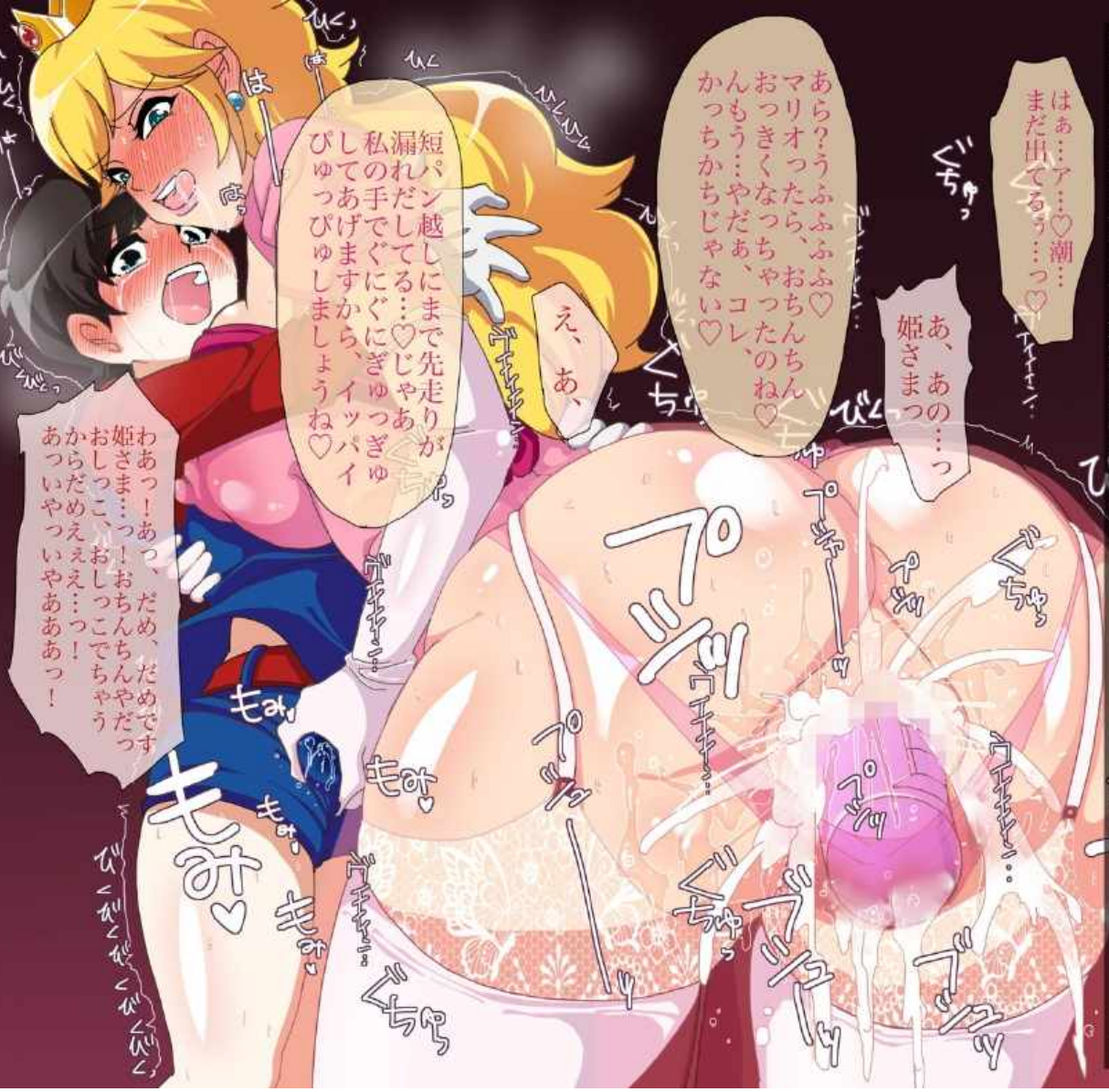
ぐちゅっ
ぐちゅっ
ぐちゅっ

少年は気付いた…姫の様子がおかしい。気のせいだろうか、先程より水音が激しくなっている気がする。それも、すぐ近くから聞こえてくるような。得体の知れない恐怖に少しだけ身を竦ませ、それでも必死に姫を守ろうとしがみつく。しかしそんな少年を見て、姫は更に熱に浮かされたように息を荒げ、舌なめずりをした。

はんんっ！はぁ…んふ♡マリオぉ、本当に私、ずっと待っていたんですのよ♡私の相手ができるっ、あんっ♡あっあっあうっ、はあああんっ♡あんっあんっあっ♡
ひ、姫……っ？えっどうしたんですか？どこか苦しいんですか？
はぁっ、はふ、おっ教えてあげてもいいけどぉ…っ♡そのまえに、さっきからおまんこびちゃびちゃでっ、あっあっ、あ、も…もう限界なのぉ…っ♡ねぇ、ねぇマリオ、見て、見てぇっ、私のイクところ見てえええぇっ♡
え、うわ…っえっ、えっ？
ぐちゅっ
ぐちゅっ
ぐちゅっ

一際大きく水音が響いたかと思うと、姫が奇声を上げて大きく痙攣した。腰をガクガクと震わせて何かに耐えるように少年の身体にしがみつく。そのとき少年は初めて気付いた、意識してみれば…姫は胸を、それも特に乳首の部分をぐりぐりと少年の身体にに押し付けている。今まで気にも留めなかったのに、それが何だか酷くいやらしいことをしているような気分になる。邪念を振り払うように床へ目を落としたのが決定打だった。姫の足下に水たまりができ、床にじわじわと染みが広がっていく。スカートも湿っていて、太腿部分にぺったりと張り付き、姫の股ぐらからびしゃびしゃと液体が滴り落ちていっているのが分かる。
あっはあっ、あっ♡私いけないことしてるっ男の子抱きしめながらバイブでおまんこぐちゅぐちゅしてッ感じてるのおおおおっ♡見てマリオっ、変態な私を見てぇっ！あっイク！見てっお願い見て！アあっァアアアッイクイクイクイクイクイクイクッ！
潮吹きながらイクのッイクの見てぇぇぇ
アッすごっ
ぐちゃ
ぐちゃ
ぐちゃ

少年を胸に抱えながらオーガズムに達した姫は、そんな少年の様子に目ざとく気付いた。白く清廉なロンググローブに包まれた、たおやかで美しい指先を少年の下半身へ滑らせる。そして、高貴な身分には似つかわしくない乱暴な動きで布越しに固く膨らむペニスを握ると、そのままグニグニと揉み始めた。



少年は驚き腰を引くが、逆に背中へ回された右手でぐいと引き寄せられてしまった。性急な仕草で股間を揉みしだく姫を信じられない思いで見つめる。その内にどんどん先走りが溢れ出てきて、小便を我慢しているときのようなあの感覚が少年を襲う。

直接的な愛撫に耐えきれず、少年は呆気なく絶頂した。短パンのせいで空中へ飛び散ることなくせき止められた精液はじわじわと下着に滲んでいく。やがて吸い取りきれなくなった布地から白いものが染み出しはじめ、少年の太腿を滴り落ちる。少年が絶頂しても姫は手を休めることなく、ペニスを刺激するものだから、搾りとられるような感覚に少年のオーガズムの波は中々収まらなかった。

射精の快感、そして姫の前で粗相してしまったことへの羞恥と罪悪感にびっくりして泣いてしまった少年を、姫はベッドへ連れていくと優しく横たえた。ピンクを基調とした天蓋付きのベッドは広く、上には枕が二つ乗せられている。大胆にドレスを脱ぎ捨てた姫はベッドに腰掛け、後は綺麗に整えられている少年の、脱がせていくオーガズムの余韻でぼうっとしている。丸裸にさせると、おもむろに姫自身もベッドの上へ身を丁寧に脱がせるように下半身を少年の顔の上に滑らせ、淫汁で濡れそぼった陰部を見せつけるように掲げ上げた。そしてそのはち切れんばかりの大きな乳房で、未だ興奮冷めやらぬ少年の小さなペニスを挟むと、彼はいとも容易く二度目の射精に身を震わせた。勢いの良く発射された精液は、けれど姫の豊満な媚肉に阻まれ、ほんの少しの量だけ谷間から顔を覗かせる。

敏感な少年に機嫌を良くした姫は、更にぐにぐにとペニスを締め付けるように意識して、自ら乳房を揉みしだいた。少年の下に見えるのは乳房の裏側だけで、突然もたらされたペニスへの刺激に目を回すしかない。見えない分余計に快感が強調されるようで、暖かくペニスを包み込んでくる柔らかい肉に更にこみ上げてくるものを感じ、抗えるはずもなく再び射精してしまった。乱れた息を整えつつ、少年はようやく事態を把握した。下着も身に着けていない姫の乳房に包まれているというだけで、少年のペニスは再び硬さを取り戻す。

四度目の射精を終え、自然と少年の息が荒くなる。あまりの快楽に頭が焼き切れてしまいそうだ。太腿に伝ってくる自ら放った熱を、少年は他人事のように考えていた。

と、突然何かを飲み下す音が聞こえてきた。ゴク…ゴク…とゆっくりではあるが、やけにはっきりとした嚥下音が響く。ちらりと見える金の頭が、下を向いて時折上下に揺れている。少年はにわかには信じられなかった、まさか姫が、ペニスから排泄された液体を飲むなんてそんな汚いこと。そう思いながらも、その背徳的な行為に少年のペニスは更にギンと硬くなった。

ふいに、少年の顔に生温い雫がぴちゃりと落ちた。少年が驚いて上を向くと、姫の蜜壷がヒクヒクと収縮し、涎を垂らすように絶え間なく愛液を漏らしている。少年はその時気付いたが、姫の秘所は既に、少し動いただけでくちゅりと淫猥な音を鳴らすほどびちゃびちゃに濡れそぼっていた。その光景を見ただけで少年はペニスを滾らせ、気付かぬうちに射精していた。

止めどなく流れ落ちてくる姫の淫汁を顔で受け止めていると、痙攣するだけだった秘部が違う動きを見せた。クリトリスは充血してより大きくなり、膣口がきゅうと窄まったかと思えばまた開き、その上の小さな穴…尿道口がせり出してくる。愛液を漏らしながら一層激しくくぱくぱと開閉を繰り返すそこから目が離せず、少年は再び股間に熱が集まるのを感じた、そのときだった――

チョロ…と尿道口から尿が漏れたかと思うと、途端水しぶきをあげて少年の顔の上に勢い良く降り注いだ。咄嗟のことで鼻呼吸を忘れ思わず口を閉じ、少年は叩き付けられるようなその水圧に思わず目が入り込んでくる。独特の匂いが鼻につき、口を開けると、顔を濡らしベッドに尿が染みを広げていく。姫は年端も行かない少年の頭全体を伝って大量の背徳的な行為に、異常なまでに興奮していた。可愛らしい顔の小便をかけるというせて、口内に溜まった尿を嚥下するその様が愛おしくてたまらない。そして少年もまた、姫に尿をかけられると身体の芯からゾクゾクとした快楽が駆け巡り、絶頂した。図らずも、乳房に挟まれたときやそれに刺激されたときと比べて数倍の快感を自ら腰を揺らし乳房に打ち付けるも、それでも中々射精が止まらないその身に宿した少年は、ほどだった。

ああぁっもうだめっ我慢できないわっ！私もっ私ももっと気持ちよくしてええっ♡
はああああっ♡おまんこっおまんこおまんこっ！ショタ口まんこと貝合わせ気持ちいいいいいいッ♡♡
むごっぐっ、ごぶっぐぶううっ！ごっむ、ふむむ…ッ
きゃあっあっアッ♡そこっ♡おしっこ出る穴…ッ！あっあっそんな激しく舐めたら私ッわたくしもう…ッ！
むぐぅ――――ッ！
ぱんぱんぱん

ガクガクガク

ギシギシとベッドが揺れる。そこにいたのは快楽に溺れた二匹の獣だった。狂ったように少年の頭へと腰を降りおろし水音を立てる姫は少年の愛撫だけでは飽き足らず、淫らに陰部を叩き付け、時折ぐり、と鼻のでっぱりで感じる部分を刺激しては愛液を漏らした。一方少年も、自身の精液にまみれぐちょぐちょになった姫の乳房へ、躊躇うことなく腰を揺らし絶頂を追い求めた。一際大きくわななきオーガズムに達するも、媚肉の隙間から溢れでる精液は、今吐き出したものなのか、それとも先程吐き出したものなのかさえも分からない。

ガクガクガク

気を失った少年が目を覚ましたのは、翌日の陽も落ちかけた夕暮れどきだった。昨日の出来事が信じられなくてベッドの上で呆然としていると、いつの間に傍にきていたのか、姫が話しかけてきた。きちんとドレスを纏い、何事もなかったかのように平然と身体の具合を訪ねられたので、もしかしたらあれは夢だったのかもしれない…と少年は想い始めていた。用意された軽食を頂き、今日はもう遅いし長旅で疲れているだろうからとそのままベッドに寝かされる。やはりあれは悪い夢だったのだ。

ふと真夜中にごそごそという物音で少年が目を覚ますと、昨夜と同じく服は脱がされ、姫が半裸の姿でこちらを見ていた。これは昨日みた夢の続きに違いない。

くちゅりと卑猥な音をならし、吸い付くようにヒダがきゅうと少年のペニスを包み込む。柔らかい肉の中で少年は動きもしない内に射精してしまった。少年の赤く充血したペニスが脈動を打ち、蜜壺の中へ精液を送り込んでいく。少年は両手でぎゅうとシーツを掴み、快感で腰がへたり込んでしまいそうになるのを必死に耐えた。

あっ！あっあああっあ…っ
あっいっ！おちんちんが
あっいいいいいいいっ！

あんっ♡動いてもいないのに
出しちゃったの？はぁ…っせっかちさん♡
あ、あ、おまんこの中にザーメンが
入ってくる…♡びゅるびゅるって、
いっぱい…やだぁ、おちんぽ日一杯
びくびくして、あ、
まだ出てるぅっ♡

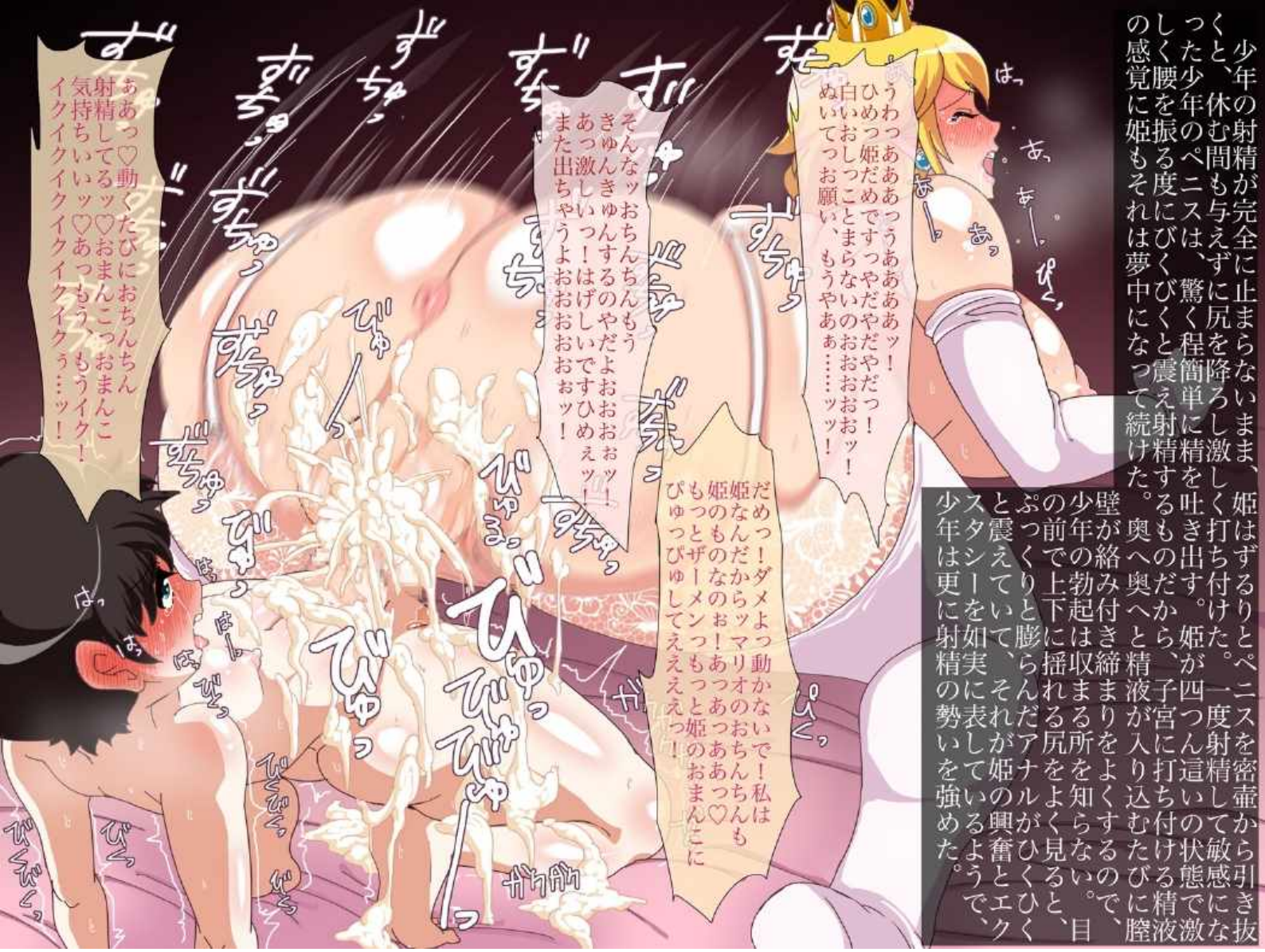
あっあっあっ、うあっ
あああっ！おちんちん
溶けちゃうううぅ…っ！

はぁん…♡もう、そんなことじゃ
耐えられないわよぉ…？うふふ、
おちんちん、しっかり固定しててね？

あっ、ふぇ、
え…っ？

びゅくっ!!

少年の射精が完全に止まらないまま、姫はずるりとペニスを密壷から引き抜くと、休む間も与えずに尻を降ろし激しく打ち付けた。一度射精して敏感になった少年のペニスは、驚く程簡単に精を吐き出す。姫が四つん這いの状態で激しく腰を振る度にびくびくと震え射精するものだから、子宮に打ち付ける精液の感覚に姫もそれは夢中になって続けた。奥へ奥へと精液が入り込むたびに膣壁が絡み付き締まりをよくするので、少年の勃起は収まる所を知らない。目の前で上下に揺れる尻をよく見ると、ぷっくりと膨らんだアナルがひくひくと震えていて、それが姫の興奮とエクスタシーを如実に表しているようで、少年は更に射精の勢いを強めた。



シたな　なに少いぺま　揺るで直よる
ー精く凄っ吹年たニで途らり少接りか姫
ッ液注まてきの　°ス持端し、と年子奥のは
にががじ少出　`射にち　、そが宮まよ睾
飛弧れい年さペ精向上ーーの射へでう丸
びをる水をれニをかげ気瞬熟精届ぺにま
散描　°圧絶そス止つるに動ししかニ深で
つい行が頂れのめてと腰きたたんスくの
たてきぺへが根て大　`をを身とばが腰み
ぼ場ニとま元い量引浮止体きか入を込
たをス導たへなのきかめを　°り下も
ぼなへい刺一か潮抜せた大姫の込げう
たく満た激直つをい高　°きが勢みたと
とし遍　°と線た吹たく　っくぶい　、°す

少年は呆然とその光景を眺めていた。姫の股から透明の液体が滝のように落ちしぶきをあげ、ペニスを濡らしていく。姫の卑猥な醜態、生暖かい透明な水の刺激でもう一度腰を震わせオーガズムに達すると、少年は体勢を崩しシーツへ沈んだ。精液でべとべとの火照った身体に、冷たいシーツが気持ち良い。やけにリアルな感触に目眩を覚えたが、どうせこれも夢なのだろうと少年は安心して柔らかな眠りへおちていった。
あ、あっ、はあっはあぁっ！フーッフーっ！くうっっうううっ！……は、はぁ…い、いっぱい…潮吹きしちゃ、あ、アアアあぁぁっ♡
はぁ、あ、あ、あ…ひめのおしっこ、が、ぼくのおちんちんに…ッあ、あああああぁ…ッ！
んふっ♡私の潮でおちんちんイっちゃったの？
は、く、ひぐうううっ
ぷしっ
ぶしゅっ
ぴゅっ
ぴゅく
ぴちゃ
ぴちゃぴちゃ
あぁ…そういえば、男の子もこの、透明なおしっこ出せるのよ♡うふふ、それじゃあ明日、『夢の中で』試してみましょうね♡おやすみなさい、マリオ…♡

夢であることを信じていた少年は、しかし翌日も、朝の柔らかな日差しを見ることはなかった。目を覚ますと夕方、ベッドの上で、身体が気怠く中々起き上がることができない。腰のあたりが酷く重く、歩くこともままならない。姫の用意した食事をとると抗い難い眠気が少年を襲い、気付くと再びあの「夢」の中にいた。今日もまた、姫は少年のペニスを弄ぶ。

姫は少年の身体を動けないように抱きかかえると、優しげな動作で小さなペニスを扱き始める。すっかり快楽を植え付けられたその身体は、姫の手淫によって驚く程簡単に精を吐き出した。尿道の中を精液が駆け抜ける感覚に、少年はぎゅうと姫の腕を掴む。ペニスに感じる熱はどんどん少年の思考を奪っていく。

未だ慣れない射精の余韻と、姫の前に陰部をさらけ出す羞恥心を煽る体勢に、少年の身体は緊張している。これからすることの前準備として、硬い身体を解すために、姫は少年の吐き出した精液を指ですくい、にちゃにちゃと数度馴染ませたかと思うと、ひくひくと震える彼のアナルにゆっくりと挿入した。快楽のツボを的確に突いてくる姫の指に、少年は瞬く間に絶頂した。

快楽の度を超えた少年が、淫らに動く手を止めてほしいと懇願するも、姫は全く意に介さなかった。それどころか、びくびくと震える少年を楽しそうに見やり、ペニスを扱く右手はより激しく、前立腺をかすっていた左手はより強くぐりぐりと敏感な場所を抉った。射精の波が終わる頃には、姫の手と胸はすっかり少年の精液で汚れていた。

身体をだらりと弛緩させた少年は、突然わき起こった感覚にひゅっと息を飲んだ。見ると、少年のアナルから引き抜いた左手でペニスの先端を柔らかく刺激している。触れるか触れないかの距離で動く手、少年はあまりのくすぐったさに身を激しく捩った。何とか逃げようとするが、女性とはいえ、大人の力でがっちりと拘束されていてとても抜け出せない。

数分後、少年に異変が起こった。くすぐったいだけだったペニスの先にどんどん熱が集まると、まるで肺が押しつぶされたような感覚に息が苦しくなり、自然と咳き込んでしまう。それを見た姫は、より左手の動きを早め、今度はぐりぐりと強く亀頭を刺激した。

そのときだった。少年は突然、小便を極限まで我慢したときのような疼きをペニスに感じとる。

衝動に抗えるはずもなく、少年は全身をびくびくと痙攣させ、ペニスから勢い良く透明な液体を噴射した。射精や放尿とは違う、強制的で我慢のしようもない強烈な排泄行為に、少年は歯を食いしばり顔を真っ赤にして獣のような声をあげることしかできない。掴まれた腕に痛い程爪を立てられても、姫は息を荒くして少年を見ていた。

びくっ
びくっ
びくっ

身体中の水分を出し切るかのように大量の水が少年のペニスから溢れ出す。虚ろな目で姫の媚肉を噛みながら耐える様は、まさに狂人という他ない。ベッドをびちゃびちゃに濡らし、少年は凄まじい絶頂の渦にのみ込まれていった。
きゃああっ！凄い勢いね！おちんちんから出てるとは到底思えないわっ♡
うふふっ♡これできっと、マリオも潮吹きの虜。これだけ出せるんだから、あとは慣れさせるだけ…うふふ、私がマリオをすぐにお漏らししちゃうエッチな潮吹き体質に変えてあげますわ♡

ぶしゃあああ!!!
ばばば

そうして幾夜が過ぎ、少年は自分が今いるそこが夢か現かあやふやで、ただ只管に与えられる快楽に身を震わせていた。少年の薄い胸に、姫の柔らかで大きな媚肉が押し付けられる。既に幾度目かの射精を終え、姫の秘部と少年のペニスは精液でべとべとに汚れていた。

なおも姫は腰を振り、少年は刺激に耐えられず絶頂し精を吐き出した。ぶぴゅぶぴゅと秘部から精液が溢れ出し、軽いオーガズムに達した姫のアナルからも先程中出しされたらしい精液が飛び出してくる。強く身体を抑えつけている姫と、快楽で指一本動かせないでいる少年の息が荒くなる。

しかし姫は不満げに、更に腰を振りつづけた。ゆさゆさとその大きな尻を揺らし、少年も数度の絶頂を繰り返したが、それでも姫はペニスへの刺激を止めなかった。やがて亀頭を重点的にせめられ続けた少年は、あの急激に膀胱が刺激されたような強烈な衝動を感じた。なけなしの理性が姫の中に小便を漏らすことを拒絶する。

あん、はぁあ…っん、ねぇまだなの？私のしたいこと…わかるでしょう？毎日仕込んであげたじゃない、ね、おまんこに挿れたままで、いつもみたいに潮吹きすればいいの♡
ハーッ、は、や…おしっこ…は、ひ、めに、だしちゃ、
もう！こんなになるまで犯してあげてるのに、強情ね。おしっこじゃないし、私がしてって言ってるのに…ねぇマリオ、私のお願い、聞いてくれないの？私は姫よ？
あ、あ、あ、あ、
ねぇマリオ、私貴方が潮吹きする姿を見てずっと思ってたの。これを私のおまんこの中で爆発させて、子宮まで届いたらどうなるんだろうって……もう一度言うわよ？マリオの、この、硬くてたっくさんぴゅっぴゅできる素敵なおちんぽで、私のおまんこを貴方のものにしてほしいの…♡
……ッッッ！ひ、
ぼびゅ
びゅっ
びゅーっ
びゅるっ
びゅっ
びゅっ
びゅ

少年の身体がガクガクと痙攣し、水鉄砲のように子宮目掛けて一直線に潮が噴き出された。びちゃびちゃととてつもない勢いで子宮の壁に潮がぶつかる。人間のものとは思えない叫び声をあげながら、二人は巨大なオーガズムの波に揉まれていく。

ぴぎッ子宮がっ子宮がっ壊れるっ
きぃぃッ
プシッ
ぶびゅ
ぷしゅっ
ぶしゅっ
ゴポ
ゴポ…
ぷしゃ
ぷしっ
ぷっ
プッ
プシャッ
ぷっ
じょぼっ
がん がん
がん
がん
がん
がん
がん
がん
づぁぁ〜ッ
ぁぁ〜ッ
潮で潮でまぁ〜
じゃうぅぅ〜ッ
びくっ
びくっ
びくっ

あぁっじゃごい、イッぱなぢ!!!
あ
イきすぎてじんじゃうッ!!!
くぎぎぃぃぃ!!!
じょぼぼぼぼ
ぷしゃ
ぷしゃ
ぷしゃ

それからもう幾日が経過したのだろう。次に少年の意識が戻ったとき五人の女性に囲まれ、そこら中が自身の精液にまみれている状態だった。ここがどこなのか、そしてこの人たちは誰なのか、自分は誰なのか、何をしているのか？少年はもう何も分からない。

ちょっとお先輩がたっあたしにもチンポ触らせてくださいよぉ！あたしの中にはまだ5回しか中出ししてないんですよぉ？

ぎゅう

ぎゅう

あー！

あー！

フフン、一番下っ端なんだからクリボーちゃんはお・あ・ず・け♡

そんなぁ、酷いですぅ！

むぎゅ♡

姉さん、あんまりいじめないであげてくださいよ。それにしてもこの子、これだけ出してるのに勃起したままですね。やっぱりこれハンマーブロスさんの薬ですか？

むぎゅ♡

ええ、そうよ。例のスターエキスに改良を加えた新薬なの。媚薬効果に射精した瞬間に再び精液が作られる特性を持つんだけど、吐き出されたエネルギーを固まりを皮膚吸収できるように栄養を変える成分も入ってるから、体質の続く限りずっと射精し続けられる体力っていう代物よ。素敵でしょ？

うふふ、貴方、相変わらず惨いお薬作るのね

何おっしゃいます、姫様の作り出したスターが元なんじゃないですか

女達は意識が朦朧としている少年のペニスを思う存分弄んだ。抵抗もできず留まることのない射精の快楽に力なく身を任せている。精液のすえた匂いが部屋中に充満し、それにより女達は更に興奮した様子で、精を吐き出す少年のペニスに魅入っている。

はぁっ
あっ！また射精してる！もー、めっちゃ勿体ない…せめておまんこに挿れましょうよぉ～
それじゃ喧嘩になっちゃうからこうやって共有してるんじゃないのよ。うわ、何コレ、凄いびくびくしてる…
喧嘩してたのはクリボーちゃんと姉さんだけだったと思うけど…
ぶぴゅっ!!
ぶぴゅっ
ぶぴゅっ
ぶぴゅっ

既に数十回の射精を終えた少年のペニスは、息を吹きかけられただけで簡単に潮を吹いた。耐えがたいオーガズムに襲われた少年は、しかし絶叫する力もなく、か細い息を漏らすだけだった。

はぁっ

はぁっ

はぁっ

はぁっ

はぁっ

はぁっ

はぁっ

はぁっ

はぁっ

はぁっ

プシャッ

プシャッ

プシャッ

プシャッ

プシャッ

プシャッ

プシャッ

ブシュッ

ビクッ

ビクッ

ビク

数分が経っても止まらない潮吹きに弱い身体は痙攣しつづける。長い冒険の果て、守るべき姫に幼い身体を無理矢理性に目覚めさせられた少年は、自我をなくし、良いように陵辱されたその身体はとうとう壊れてしまったのだった。
え？え？ちょ、ちょっと…全然止まらないわよ？どうなってるの？
ば、バイブみたいにおちんぽぶるぶる震えてます…っ…ど、どうしましょう…？
ひ、姫様ぁ、もう4・5分は経ってると思うんですけどぉ…
うーん…壊れちゃったみたいね。まぁ、今回は長く持った方かしら
えっ、じゃあこの子どうするんですかぁ？…ま、まさか…っ
いやねぇ、姫様が無駄な殺生を好まないのはクリボーだって知ってるでしょう？『あの部屋』にいれておくのよ
あ、あの部屋…ですかぁ…？
あぁ、クリボーはまだ見たことがなかったわね。じゃあ、一緒に連れていってあげましょう
はあっ
プッ
プシュッ
プシャー
あ～～～

ここは茸王国。資源に溢れた平和で豊かな国は、賢く聡明で美しいお姫様によって統治されている。魔法使いでもある姫は、しかしそれに頼ることなく自らの知恵と行動力で国を発展させてきた。

しかし姫には、一つだけ問題があった。彼女は重度の色狂いだったのだ。平和なこの国に、血気盛んで精力溢れる者は中々おらず、城の兵をかき集めてもお姫を満足させることは叶わなかった。それはやがて国を動かす職務にも支障をきたし始める。

姫なしではこの国の恒久たる平和に陰りが差してしまう。悩みに悩んだ国の大臣は、ある一つの計画を打ち出した。架空の悪者を生み出し姫を攫わせ、そして助けに来た強く勇気ある者を姫の慰み者にする。そして終わった後は秘密裏に処分し、再び勇者が現れるまで姫には職務を全うしていただく――

大臣が姫に打診すると、同じく自身の性欲に悩んでいた姫は真っ先に飛びつき、早速『魔法を使って悪役『クッパ』と、そして配下のモンスターを作り出した。賞金も用意し、国民に姫救出のお触れを出すと、すぐさま幾人かの勇気あるものが冒険へと旅立った。

姫の作りだしたモンスターが冒険者たちを性的に襲いだす始末。更にモンスターは作り出した本人にうちでは姫の元まで辿りつけないのだ。強すぎて、平和に慣れきった国民たちは姫の救出を諦めかけていた。

頭を抱えた城の倒れた冒険者たちは、しかしあるとき一つの噂を耳にした。

『モンスターに倒された者は、何故か復活する。少年がいる』――

モンスターに縛られた思いで大臣たちが現場へ向かうと、確かにモンスターに連れ去られたあと、また同じ少年が後からその道を通るのを見わたし、次にくる少年は弱かったり強かったり、背が高かったり、やらしかったり、少女だったりと先程の少年と似ているようで少し違うようだ。

『同じように冒険に出てくる少年』に負けた後、何か神懸かり的な力で『別の少年』に絞ることにした。モンスターに負けた少年は消えることなくその場にとどまされてもなにこの計画になる。

大臣『陵辱』は明らかに限界まで陵辱された少年は、善良な国民を無駄に減らすこともない。唯一考え留まり、別の少年を天秤にかけ、傾くのは当然国であった。

判断続けるこのだが、モンスターの報告で消えるこのだが、モンスターの少年がまだ若く守られるべき存在だということであった。

少年誕生し、『少年』に冒険を負けた少年は、ま年に、ま年を姫の元に向かわせるため、ある程度打つ限りつけはないく、限別の少年の少年の生み出したコインを配置してふるいをかけた。

高たちは生どうよくるとこ、モンスターと先程の少年と何か懸かり的な素晴らしい報告で

陵辱されたコインは、一定時間無敵になるスーパーモンスター

さぁ皆、新しい仲間よ♡仲良くしてあげてね？
きゃあっ！何ですかこれぇ…！すごい匂い…やだ、この白いの、まさか全部精液…ッ？
姫様が「使い終わった」と判断した子は皆この部屋に入れておくの。ああ、出来るだけ近付かない方が良いわよ。
え？
この集団の中に飛び込んだらこの子たちと同じになるまで犯されるわ
ひ、ひぇぇ…

MARIO
000721

x03

WORLD
∞

TIME
∞

GAME OVER

▷ CONTINUE

END